

I 市民とは？

1 自分の社会のあり方を決める

だれでもが市民（普遍的市民）
自分の社会のあり方・行き方を決める（主権者）
市民の新しさ：たかだか数十年の歴史
市民の新しさ：まだ市民たりえていない人びと
投票権を持つだけが市民ではない
市民であることの恐ろしさ

2 市民社会の成り立ちと広がり

自治都市から出発
市民革命（1）：イギリス革命
市民革命（2）：アメリカ独立革命
市民革命（3）：フランス大革命
ナショナリズムと市民
植民地主義と帝国主義

3 資本家・資本主義と市民社会

ブルジョワとしての市民
最初は資本主義の精神
資本蓄積のメカニズムに引きずられる資本家
資本主義膨張と恐慌
修正資本主義の出現
グローバル化する資本主義

4 労働者・社会主義と市民社会

資本主義が生み出した労働者
組合を結成して対抗へ
普通選挙の普及にも貢献：一株一票制から一人一票制へ
女性と少数民族も貢献
社会主義の理想と実現手段
前提条件としての市民社会

5 植民地解放後と市民社会

民族解放運動と植民地解放革命

政治的独立と経済的自立の困難

従属の構造

東アジアの経済成長

相互移民と文化的闘争への拡大：カルチュラル・スタディーズ

コロニーの摘発とポストコロニアリズム

6 本当の市民社会はこれから

先進社会の行き詰まり

新自由主義（ネオリベラリズム）の登場

近代主義（モダニズム）の見直しと徹底：「未完の近代」

他の行き方としてのポストモダニズム

ポストコロニアリズムからの批判

未市民と脱市民：サバルタンとマルチチュード

II 市民が社会をとらえる

1 全身で世界をとらえる

市民になり、なり直すために

「裸一貫」からの再出発

受けてきた教育の洗い直し

習慣の束としての私

それをたえず超え出ていく私

超えながらたえず人間の世界に内在

2 共同性と階層性の相克

社会の4つの位相

共同性としての社会

階層化する社会

社会膨張のメカニズム

民族と階級の起源

階級闘争論が失敗した理由

3 宗教・国家・市場・都市

平等と不平等の矛盾を緩和する

宗教は最初の社会統治

宗教の物化したものが国家

人間的自然としての市場

妥協形態としての都市

都市を中心とする社会のシステム化

4 一次システムとしての帝国

都市の形成と文明
特異点としての皇帝の身体
膨張の必然性と軍隊
補給の基礎としての農業生産力
帝国の興亡と文明の交錯
人間的自然としての市場の拡大

5 二次システムとしての市民社会

個人としての市民
宗教の内面化から無神論へ：科学技術の発達
国民国家の形成と民主主義の普及
普遍的市場化と止めどない産業革命
巨大化する都市と個人の匿名化
膨張する国民国家の競合へ

6 社会の生態系内在性

文明と環境破壊
産業革命と環境破壊
第二次世界大戦後の経済成長と環境破壊
南北間格差から地球生態系の危機へ
少子高齢化で逆照射される人口爆発
生態系内在性の自覚化へ

III 変わりゆく現代社会

1 新しい帝国か？

ハートとネグリの議論
誤解されやすい「帝国」の概念
少なくとも新帝国というべき
社会の4つの位相から理解する
問題から歴史をへて構造へ
意味と戦略と主体の発見

2 戦争の拡散と平和の意味

局地紛争からテロリズムへ
冷戦終結とソ連東欧解体の余波
アメリカの超大国化と一国主義的傾向の出現
新帝国の軍事化とテロリズムのグローバル化
軍事帝国とテロの同時制御としての平和
非暴力の地球市民

3 経済成長と貧富の格差

格差の縮小と拡大
大国的現実主義の勝利と問題点
サミット体制・安保理体制・中間地帯・アフリカ
多頭龍の尻尾切りか？
人口大国の中太り化と低開発地域の集中援助
節制する地球市民

4 二の次にされる環境問題

歯止めのかからない地球環境破壊
人口大国の経済成長とアメリカの経済および戦争
新帝国・核軍産複合体・多国籍企業・成長国家群
近代的生産・生活様式の現代化とグローバル化
電子情報大衆消費社会の普遍化と生活様式の画一・多様化
ネットワークするヒトとしての市民

5 さまざまな身体が多様な連鎖

増える身体・飢える身体・病む身体・とまどう身体
人口爆発の継続と少子高齢化の途上国への広がり
新帝国下の少子高齢化と内部途上世界・途上世界
手段としての出生・価値としての出生・選択としての出生
リプロダクティヴ・ヘルス／ライツと高齢者・青年対策
愛し合うヒトとしての市民

6 国連と地球市民社会

国連改革の停滞とNGOの簇生
国連の機能化とアメリカ一国主義との対立
国民国家・超大国・サミット・国連・NGO
新帝国に支配される国際社会と地球市民社会の胎動
国民社会の市民社会化をふまえて地球市民社会へ
住民的・国民的・国際的・地球市民へ

IV 市民の生き方

1 市民生活の構造

労働生活の場と市民生活の場
生活形態と社会構造との関連
生活・社会構造の位相循環
職場の規律と社会規範：現代の聖と俗
学校・青春・余暇・大学・青年：現代の遊
学生運動から市民活動へ：現代的乱の可能性

2 どう仕事をするか？

Calling としての職業

マッチかミスマッチか

仕事志向・キャリア志向・手段主義・組合主義

仕事をつうじて社会を変える

キャリアをつうじて社会を変える

仕事以外で社会を変える

3 社会参加のさまざまな形態

労働組合の変容

市民運動への参加

市民運動から市民活動へ

ネットワーク革命の意味

マイルームからの参加

遊と乱のあいだの振動

4 永劫回帰としての愛と死

生態系内在性の確認

セクシュアリティの浮上

家族アイデンティティの多様化

教育にたいする社会の義務

介護にたいする社会の義務

死と聖俗遊乱一切皆空

5 投票の意味と中途半端さ

それでも社会は良い方がよい

主権者としての市民・再考

選挙制度のために十分に市民になれない

意に染む政党がない

比例代表制と少数意見の尊重

新帝国はそれでも脱市民化する

6 市民になり直す

一国市民から地球市民へ

一国市民の権利を放棄しない

同時に地球市民への多様なルートを開く

市民（シティズン）からネットワーク市民（ネティズン）へ

言語の問題を実践的に考えていく

永劫回帰としての愛と死・再論

I 市民とは？

1 自分の社会のあり方を決める

だれでもが市民（普遍的市民）

あなたや私

〇〇市の市民。区町村民は市民ではない？ これは特殊的市民

だれでもが市民：普遍的市民

英語でも **citizen** は一般にそのように使われる。

日本語の国民との違い。

日本国憲法の用語法。**People** を国民と訳している。**People** は本来は人民。

人民はそれ自体ではまだ市民ではない。人民が「人民の、人民による、人民のための政治」を実践するようになって初めて市民になる。

日本国憲法は日本の人民が市民であることを述べている。

日本国憲法の国民は日本（国）市民と解すべき。

国民という言葉によって、市民を国に囲ってしまうべきではない。Cf.ナショナリズムの悪い面。

自分の社会のあり方・行き方を決める（主権者）

市民は主権者。

自分の社会のあり方・行き方を自分で決める。

それを制度化したものが普通選挙 **universal suffrage** を前提とする間接民主主義。

直接民主主義は、社会が大きくなると、実施困難。

それでも、テーマによっては国民投票 **or** 住民投票 **referendum**（これも本来は市民投票と訳すべき）が有効。アメリカではよく行われている。

日本国憲法の改正のための国民投票もこの意味の **referendum**。

市民の新しさ：たかだか数十年の歴史

このような市民が世界中に普及したのはたかだかこの数十年。

先進国でも、普通選挙実現までには、相当な時間がかかった。

イギリス：1832 第1回選挙法改正。チャーティスト運動←人民憲章 **People's Charter**。1867 第2回選挙法改正、都市労働者の多数が選挙権獲得。1884 第3回選挙法改正、農業労働者なども選挙権、男子普通選挙に近づく。1918 第4回選挙法改正。21歳以上の男性と30歳以上の女性に。1928 第5回選挙法改正。21歳以上のすべての成年男女に。

フランス：二月革命のあと、1849 男子普通選挙。1944 女子にまで拡大

アメリカ：19C 半ばから各州で男子普通選挙。19C 後半からいくつもの州で女子にも。1870 連邦レヴェルで黒人にも選挙権。激しい女性参政権運動のあと、1920 連邦レヴェルで女子にも普通選挙。

ドイツ：1867 北ドイツ連邦で男子普通選挙。1871 統一とともにドイツ帝国全体に男子普通選挙。1918 ワイマール憲法、女子にも拡大。（世界で最初に女性を含む普通選挙を実施したのはニュージーランド, 1893）

日本：1925 男子普通選挙。1945 女子にも拡大。

ロシア：1905 ニコライ 2 世の「十月宣言」で国会開設と普通選挙が約束されるも、反動的な選挙法のもとで不完全にしか行われず。1917 大革命で体制変わる。

中南米諸国を除き、旧植民地＝途上諸国の多くに普通選挙が実現するのは、ようやく第二次世界大戦後、これら諸国が独立してからのこと。

市民の新しさ：まだ市民たりえていない人びと

旧ソ連・東欧、中国、ヴェトナム、キューバ、北朝鮮などの選挙制度

共産党一党独裁のもとで、事実上は党推薦の候補を信任。

旧ソ連では、ゴルバチョフのペレストロイカのもと 1988 複数候補を容認しての選挙。1990 大統領制導入。

この前後から旧東欧およびソ連は、全体として、システムの崩壊で普通選挙へ。

中国、ヴェトナム、キューバはまだ。

北朝鮮は特異な例。

中国では、普通選挙を求める下からの動きの萌芽。が、普通選挙はまだ。

しかし、制度の有無だけで実質を判断できないとすれば、先進諸国の人びとだって、まだまだ本当の市民たりえていないのではないか？

二大政党制・小選挙区制は本当に良い制度か？

市民のあいだの意見分布を正確に反映するのが先決なのではないか？

比例代表制：ヨーロッパの多くに国で。ニュージーランドも。

投票権を持つだけが市民ではない

投票権を持つだけが市民ではないかもしれない。

制度だけでなく、制度がどう機能しているか、実質も見なければならない。

投票率の低下。←選挙制度の問題。が、それだけでなく、

政治的無関心 *political apathy or indifference*。無党派とは区別されなければならないが。

市民性の意味を理解できず、せっかく獲得したり、与えられたりした市民性を放棄してしまっている人びと。

市民であることの恐ろしさ

真剣に考えると、市民であることは恐ろしいことかもしれない。

すべてを自分で決めなくてはならない、ということの意味。

神仏にすがらない。

それが怖いからこそ、人びとは、強いイデオロギーに自己没入しようとした。

ファシズム、自由からの逃走。

そしてマルクス主義：これは前近代性のため？

そして、独裁者を生み出した。

独裁者の害悪に気づいた社会、および害悪を指摘してきた社会でも、さまざまな宗教運動がくり返し起こっている。

市民性と矛盾しないまじめな宗教活動は評価されなければならないが。

2 市民社会の成り立ちと広がり

自治都市から出発

市民 citizen, citoyen, bourgeois, Bürger

古代都市から中世都市へ、ローマ帝国の衰亡、農村で自給自足、荘園が力を付けてきて、余剰農産物の交換へ

11～12世紀、商業ルネッサンス、定期市（週市）、交換経済

十字軍の影響、交通の発達、遠隔地貿易、イタリア、北ドイツ、フランドル、ロンドン、シャンパーニュ

自治都市、特許状、自治権、都市同盟、Lombardia 同盟、Hansa 同盟

商人ギルド merchant guild から同職ギルド craft guild へ、とくにドイツで、Zunft 闘争

15～16世紀、Fugger 家：皇帝の即位を左右、Medici 家：教皇を出す

市民革命（1）：イギリス革命

ピューリタン革命 1640-60。清教徒革命。ジェームズ一世：王権神授説、チャールズ一世：専政を続ける。1628 権利の請願。1640 長期議会、国王の権限を次々に制限。42：国王派（騎士党）と議会派（円頂党）、内乱。クロムウェル、軍隊を改革して形勢を逆転。議会派に長老派と独立派の対立生まれ、後者の中心に。長老派の画策に反対して、レベラーズ登場。49年1月30日ロンドン市民の見守るなかで国王は処刑。革命最高潮。53 クロムウェル、護国卿という終身の地位。58 病死。60 チャールズ2世即位、王政復古。しかし、議会政治の基調は確立。イギリス近代化の画期。その後、ジェームズ二世、カトリック復活を企てる。

名誉革命 1688-89。ジェームズ二世を追放し、長女メアリーとオランダ総督ウィレムを迎え、立憲君主制に。カトリック復活に反対で、トーリーとホイッグの利害一致。権利宣言→権利の章典に。しかし、トーリーとホイッグは、アイルランド抑圧と世界の植民地支配でも一致。名誉革命が「名誉」であったのは、民衆の蜂起をおそれたため。この意味で市民革命としては限界。が、産業革命を準備して、市民革命の労働者への普及の基礎となる。

市民革命（2）：アメリカ独立革命

七年戦争 1756-63(アメリカにおけるフレンチ・インディアン戦争, 1754-)の終了後、イギリスと植民地との対立深まる。1773 ボストン茶会事件。1774 フィラデルフィア大陸会議。1775 コンコード・レキシントンの戦い、独立戦争開始。1776 トーマス・ペイン『コモンセンス』。1776.7.4 独立宣言。1783 最終講和。1788 連邦憲法発効。1789.6 ワシントンを初代大統領に。

市民革命ではなく、植民地独立？ イギリスからやってきた植民者たちが、権利の章典などを使って本国から独立した。ワシントンと奴隷。合州国成立後の白人支配の継続。

市民革命（3）：フランス大革命

それでもアメリカ独立革命はフランスに影響。ルイ14世の絶対王政後、全社会的に矛盾を深めていたフランスで、市民革命は徹底し、明確化する。フランス大革命、1787年に王権に対する貴族の反抗で口火が切られ、89年から全社会層を巻き込む本格的な革命になり、絶対王政を倒して、立憲王政から共和政へとしだいに急進化する。山岳派とジャコバンクラブ：ロベスピエール・ルソーの影響。しかし、94年のテルミドールの反動ののち退潮に向かい、99年にナポレオンの政権掌握をもって終わる。単に政治上の変革であるにとどまらず、前近代的な社会体制を変革して近代ブルジョア社会を樹立した革命であるので、世界史上、ブルジョア革命(市民革命)の代表的なものとされる。

フランスではその後、ナポレオンの没落と王政復古後も市民たちの革命的な動きがくり返され、ヨーロッパ中に、そして世界に市民革命を広めていく。

1830 七月革命、48 二月革命、ドイツでは三月革命。61 イタリア王国成立。71 ドイツ帝国成立。68 日本、明治維新。自由民権運動。81 国会開設の約束。89 大日本帝国憲法。90 二院制の議会開設。1912 中国、辛亥革命。などをつうじて世界に波及。

ナショナリズムと市民

成長期の市民たちが国民 nation としてまとめ、国民国家 nation state を創る。

名誉革命後、18 世紀の、イギリス。アダム・スミスの『諸国民の富』1776。産業革命をふまえて、分業の偉大な力を強調。分配は市場に働く「見えざる手」で調整。自由貿易へ。

大革命後のフランス。革命への干渉に反発して団結。ナポレオンもその上に。ボナパルティズム。革命の背景として、ケネーの『経済表』やサン＝シモンの産業主義などの生産力主義。

ドイツ。遅れて追いつこうとする。そのためのナショナリズム。リストの『経済学の国民的体系』1841。国民経済学↔万民経済学。生産力の理論↔交換価値の理論。1871 ようやく統一。ビスマルクの指導のもとで強国へ。

イタリア。ルネッサンスいらい都市国家が栄えたが、なかなか統一されず。フランス革命の影響でリソルジメント。マッツーニ、ガリバルディ、などが活躍。1860 統一国家。61 イタリア王国。70 ローマを併合して、首都とする。

アメリカ。独立後、ヨーロッパにたいして孤立主義。モンロー第 5 代大統領、モンロー主義。中南米を支配下に。他方、太平洋にも乗り出し、日本にペリーが来て、開国を迫る。1898 米西戦争でキューバとフィリピンを植民地に。第一次世界大戦後、ウィルソン第 28 代大統領が国際連盟づくりに貢献したが、議会の賛成を得られず。

日本。1868 明治維新。吉田松陰、坂本竜馬などが、イデオログとして活躍。

ロシア。エカチェリナ[2 世]の時代から近代化。1825 不満を持つ進歩派青年貴族がデカブリストの乱。アレクサンドル 2 世によって 1861 農奴解放。しかし、不徹底。ヴ・ナロード運動。1905 血の日曜日事件などをへて、1917 ロシア革命。二月革命と十月革命。

カナダ。フランス、ついでイギリスの植民地から、1867 自治領となり、コンフェデレーションは 1949 になってようやく完了する。

こうして、市民革命はナショナリズムの形をとりつつ世界に波及。

植民地主義と帝国主義

しかし、ナショナリズムの歴史は列強となった国民的市民社会の世界制覇をめぐる争いの歴史でもあった。

もちろん、植民地主義はもっと前から。

不完全な市民社会を背景にした世界制覇：15、6 世紀のスペイン、ポルトガル。

より進んだ市民社会を背景にした割り込み：16、7 世紀のオランダ。

1609 スペインから独立。

本格的な国民的市民社会による世界制覇：17 世紀以降のイギリス。

対抗的な国民的市民社会による対抗的世界進出：17 世紀以降のフランス

孤立的な国民的市民社会による中南米支配と世界制覇への割り込み：19 世紀以降のアメリカ

後追いの国民的市民社会による割り込み：19 世紀後半以降のドイツと日本

帝国主義：世界の領土的再分割をめぐる列強の争い→第一次、第二次世界大戦へ

市民たちは、自らを解放しつつ、外にたいしては国民としてまとめ、戦争をくり返しつつ植民地主義をふまえて帝国主義を形成し、世界の諸民族を支配した。

普遍化していく市民（シティズン）が、事業を起こし、財力をもとに世界を征服していく市民（ブルジュワ）に支配され、引きずられ続ける。

3 資本家・資本主義と市民社会

ブルジュワとしての市民

金持ちの市民たちは、内にたいしてはブルジュワ階級としてまとめ、労働者階級を搾取して利益を上げつつ、市民社会を支配しようとした。

もう一度市民の二つの意味。二重性。

市民 citizen citoyen
 bourgeois Bürger

ブルジュワ：金を蓄え、それを元手として事業を行い、さらに金を蓄えていった市民たち。資本家。ブルジュワジー-bourgeoisie は階級としての金持ち市民=資本家階級。

最初は資本主義の精神

商業資本から産業資本への変化

資本主義の起源についての論争。解放説と禁欲説。ルネサンスと宗教改革。

宗教改革、プロテスタンティズムの影響。ルターの役割。カルヴァンの宗教改革。予定説。職業 Beruf, calling 観をそれに結びつける流れ。長老主義。

M.ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の「精神」』1904-04

初期の倫理、エートス=生活態度。生活全体に浸透した考え方、ふるまい方。

資本主義が動き出し、発展するようになるとともにエートスの形骸化

働き中毒から儲け一辺倒へ。

イギリスはヘンリー 8 世の 1534 国王至上法（首長法）、およびエリザベス 1 世の 1559 統一法でプロテスタントの国になっていた。司教（主教）主義で儀式主義ではあったが。→ピューリタン革命。

産業資本主義発展の遠因。

資本蓄積のメカニズムに引きずられる資本家

そのうえで、資本主義の精神がなぜ形骸化していかざるをえなかったかを説明するのはやはりマルクスの理論。

物々交換 $W-W$

貨幣の誕生・介入 $W-G-W$

貨幣による儲け $G-W-G' \rightarrow$ 利潤追求、貨幣の自立、商業資本

職人の生き方 $G-W-A-W'-G'$ 。自分の労働で価値を増やしている。商人ギルドと職人ギルドとの対立。ツunft 闘争。

資本による労働力の商品化

$G-W [A, P_m] -P-W'-G'$

問屋制家内工業からマニファクチュアへ。

マルクス理論の核心=労働価値説：価値を生み出すのはあくまでも労働。労働する力が労働力。

労働力の商品化：労働力を商品として買うようになったのが近代（産業）資本主義の画期的な行為。→搾取の理論、利潤追求競争の理論

これが始まると、資本（家）はたがいに激しく競争せざるを得なくなり、利潤をめぐる競争に生き残ろうとして、資本主義の精神どころではなくなっていく。

資本主義膨張と恐慌

その結果、資本主義経済はどうなっていくか？

マルクスの再生産論

不変資本 (C, c) : 工場、材料、など。

可変資本 (V, v) : 労働力。

剰余価値 (M, m) : 増えた価値のうち資本家の手に残る部分。その多くが次の生産に回される。

資本主義経済はうまく回っていくか？

生産手段生産部門（第一部門） I : C+V+M

消費財生産部門（第二部門） II : c+v+m

第一部門内部での交換 $C \Leftrightarrow C$

第二部門内部でも交換 $v+m \Leftrightarrow v+m$

第一部門と第二部門のあいだでの交換 $V+M=c$

生産が増大していく（=経済が成長していく）と、これはどんどん複雑になっていく。

各資本家がそれぞれの思惑で事業を行っていて、全体を見回して調整する者や機関がないとき、これが恒常的に成り立つのは至難の業。

国家は「夜警国家」であった。 $\Leftrightarrow$ スミスの「見えざる手」

恐慌：ものがつくられすぎ、売れなくなって企業が倒産し、労働者が失業する。そういうことが同時に、あるいは連鎖反応的に起こる。経済の大混乱。資本家の没落。労働者の貧困化。（定期的？）

それを避けるには、資本を社会化して、計画経済を実現するしかない？

→社会主義

実際には、社会化が国有化となり、国家計画経済となる。しかも一党独裁のもとで。

一党独裁国家の不合理、供給と需要の不適合、モラルの低下、官僚の腐敗、民主主義がないためにチェックできない→システムの硬直、崩壊へ

修正資本主義の出現

20 世紀に入って 1930 年代以降、私的資本と市場を残したまま、国家が経済に介入し、恐慌を回避する。ケインズ主義。

さらには第二次世界大戦後になると、技術革新を導入して意識的に生産力を高め、経済を拡大していく。ハロッド主義←シュンペーター主義。

第二次世界大戦後の資本主義諸国の経済成長

インフレーション、消費文化の弊害、環境破壊、福祉国家化（→国家の財政的危機）などで行き詰まり。

グローバル化する資本主義

社会主義はそれ以前に行き詰まっていた。

ソ連は 1885 ゴルバチョフ登場し、ペレストロイカ（改革）を試みるが失敗し、1989-91 ソ連東欧諸国崩壊へ。

中国は 1978 から改革開放＝市場社会主義へ。政治体制としての「社会主義」による事実上の資本主義化。

それらの影響もあり、資本主義諸国は新自由主義へ。規制緩和、民営化、民間活力の利用、結果として資本の側のやり放題の復活。

社会主義の崩壊で、労働側は寄る辺を失い、ますます後退。

こうした傾向が地球大に拡大。

グローバル化。

4 労働者・社会主義と市民社会

資本主義が生み出した労働者

原始的蓄積：第1次エンクロージャー、15C半ばから17C半ば。毛織物工業のため。
トーマス・モア『ユートピア』1516、「羊が人間を食んでいる」

労働力の商品化：第2次エンクロージャー、18C、綿織物工業へ。より大規模に、徹底していく。

産業革命→工場制大工業の発達（工場への機械の導入）→機械打ち壊し、ラッドライト
Luddite 運動 1811-17

人口の都市集中→労働問題、社会問題

エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態：19世紀のロンドンとマンチェスター』
1845、貧困、住宅難、犯罪、公害問題、など。

組合を結成して対抗へ

イギリスでは、団結禁止法の撤廃 1824、工場法制定 1833、などを前提に、1871 労働組
合法が制定。組合合法化：労働組合の目的が取引の制限にあるという理由だけで不法なも
のとされることはない。1875 共謀罪および財産保護法は争議行為の刑事免責を定める。
1907 労働争議法は民事免責を定める。

国際労働運動（インターナショナル）。1864 ロンドンで国際労働者協会（第一インター）。
マルクス。1871 パリ・コミューン。1876 解散。1889 第二インター、エンゲルスの指導。
1914 第一次世界大戦、第二インター分裂。資本主義のナショナリズム vs.労働者のインタ
ーナショナルナリズムという図式が崩れる。1917 ロシア革命以後は情勢大きく変化。

労働組合は、1918 ドイツのワイマール憲法以後、先進各国に広まる。

1935 アメリカのワグナー法以後、不当労働行為を禁止、労使間の調停制度を設ける。

日本は、1946 労働三法（労働組合法、労使関係調整法、労働基準法）を制定して、先進諸国
の仲間入り。

普通選挙の普及にも貢献：一株一票制から一人一票制へ

普通選挙の普及過程についてはすでに述べた。

納税額による投票権の制限から一定年齢以上の男女の無制限選挙権へ。

労働者の運動による普通選挙の実現は、ブルジョワの一株一票制をシティズンの一人一
票制に変えていったという意味を持つ。

株式会社の一株一票制との対比。株主の有限責任を前提にする株式会社は、企業家の無
限責任に立脚する会社（私的企業）よりも、法の規制を受けるだけ社会的。それでも一株
一票制。

普通選挙普及には女性や少数民族も貢献。

第一次フェミニズム。女権拡張運動。19C半ばにアメリカとイギリスで組織的に展開。
各国に波及。イギリス：1918 30歳以上の女性に、1928 21歳以上の男女に。アメリカ：
1920 連邦レベルで女性にも。

第二次世界大戦後、公民権運動←植民地解放革命、民族解放運動。有色民種に登録制度
registration system によって阻まれていた投票が普及。

第二次フェミニズム。1960年代後半以降、ウーマン・リブの形で。各国に波及。参政権
にとどまらない両性平等化。女性の実質的社会参加。

社会主義の理想と実践形態

ユートピア的社会主義：オーウェン 1771-1858：徒弟から支配人に、ニューラナークで

協同的経営、ニューハーモニーの実験、協同組合運動、労働組合運動。サン＝シモン 1760-1825：アメリカ独立戦争、フランス革命、実証主義、国際連合論の先駆、産業主義、産業共同体論、コントにつながる、新キリスト教。フーリエ 1772-1837：宇宙・社会進化論、ファランステール、家族・農業組合、産業組合、A.ブルトン・五月革命による再評価。

プルードン 1809-65、相互主義と連合主義、生産者の立場から人民銀行や税制改革、自治と自主管理。ルイ・ブラン 1811-82、労働組織論、国家援助による生産協同組合、二月革命のイデオログ。ブランキ 1805-81：ジャコバン主義とバブーフの伝統を継ぐ、カルボナリ（秘密結社）、七月革命、二月革命、パリ・コミュン、直接行動（実力行使）による権力獲得。ブランキズムの由来。

科学的社会主義から一党独裁国家へ

マルクスとエンゲルス：科学的社会主義。すでにみた近代資本主義分析をふまえて、労働者の団結と社会変革を説く。しかし、実現方法については、直接行動か議会主義か、最後までアムビヴァレント。普通選挙実現への途上にあって、むしろ運動への弾圧の方が多かったから。パリ・コミュンの惨劇。

カウツキー、ベルンシュタイン、ローザ：資本主義・帝国主義の性格と社会主義実現方法をめぐって意見分かれる。ベルンシュタインはイギリス社会主義（フェビアニズム）の経験をつまえて、マルクスの理論を反省し、現実主義を採り、労働者の倫理的向上に期待。カウツキーは、マルクス主義の理論を運動に合うように体系化し、啓蒙と労働組合の成長にも力を注いだ。帝国主義について甘い見方をとり、労働者の自然成長に期待しすぎてチャンスを失う。ローザは、資本主義・帝国主義にたいして厳しい見方をとりつつ、労働者の自発性に期待したが、戦後の急進派の蜂起に巻き込まれて虐殺される。

レーニン、スターリン：プロレタリア独裁から共産党一党独裁へ。レーニンは、マルクス主義をロシアの実情に合わせてボルシェヴィキ（多数派）を形成し、革命を成功させたが、主意主義的で強引な面も。スターリンは、後継者争いで党組織を握り、トロツキーやブハーリンなど西欧マルクス主義に理解の深く理論家としても優れた対抗馬を倒して、「一国社会主義」をめざす独裁的指導者となる。帝政の伝統のもとで、一党独裁が個人崇拜を生み出す。国家社会主義に。対外的には社会帝国主義に。

1950年代にスターリン批判、80年代にゴルバチョフのペレストロイカ、が行われたが、国家社会主義・社会帝国主義の体制を一党独裁の変更をもってしてもけっきょく改革できず、ソ連・東欧は崩壊へ。

中国は、プロレタリア文化大革命のあと、改革開放をつうじて「市場社会主義」へ。ヴェトナムも。

北朝鮮は個人崇拜の世襲化で行き場を失う。

前提条件としての市民社会

市民社会化が進んでいた所ではこうはならなかった。

アメリカ：共産主義はもとより社会主義も定着できなかった例。

日本：第二次世界大戦後、社会主義、共産主義がある程度定着したかに見えたが、3分の1の壁を越えられず、冷戦終結後、急速に萎む。アメリカ的二大政党制へ？

ヨーロッパ：社会民主主義と民主化した共産主義が定着。しばしば政権を担当。冷戦終結後、より現実主義化。右傾化？ 環境主義とグローバル化への対応を組み込んだ新しい社会民主主義？

市民社会を前提にした社会主義はなおこれからの課題。

5 植民地解放後と市民社会

民族解放運動と植民地解放革命：ラテンアメリカ

西欧国民国家による非西洋地域の植民地化は、アメリカ大陸から始まり、アジア・アフリカ全域に及んだ。

アメリカ独立革命後の植民地独立。

ラテンアメリカの諸民族は19世紀から20世紀にかけて多くが独立。スペインがナポレオンに征服されたのを機に。

1804 フランス領ハイチ、黒人共和国に。1810s 反乱が各地に。シモン・ボリバル、ベネズエラ、大コロンビア、ボリビアなどを独立させる。

サン・マルティン、アルゼンチン、チリ、ペルーの独立を指導。メキシコもイダルゴの蜂起に始まって独立。これらはクリオーリョ（植民地生まれの白人）が主体。

ブラジル、ポルトガル王子を頂いて独立帝国に。1889 共和国に。

メッテルニヒ、これらの動きに干渉しようとしたが、アメリカのモンロー主義、イギリス外相カニングのLA市場開拓政策に阻まれる。

アメリカ、1889 パン・アメリカ会議。1898 米西戦争でキューバを独立させ、保護国に。1903 パナマを独立させ、運河を完成。強力なカリブ海政策。

メキシコ革命、1910 マデロ、サパタらが革命。1917 勤労者の権利、政教分離、強大な大統領権限の民主的憲法。

民族解放運動と植民地解放革命：アジア・アフリカ

中国：1905 孫文、東京で中国同盟会を組織。三民主義。四大綱領。1911. 10. 10 辛亥革命。1912. 1 中華民国、世界でも数少ない共和政の国家。1912. 2 宣統帝溥儀退位、清朝滅びる。1948 蒋介石、国民党総統に。1949 中華人民共和国成立、国民政府台北遷都。台湾問題、未解決のまま。

朝鮮半島：日本の敗戦後、1948 大韓民国、朝鮮人民民主主義共和国、成立。南北分立。1950. 6 朝鮮戦争勃発。1951. 9 サンフランシスコ講和会議、サ条約、日米安保条約。1953. 7 休戦協定締結、南北分断固定。北朝鮮問題、未解決のまま。

フィリピン、1946 フィリピン共和国

インドネシア、1945. 8 共和国独立宣言、スカルノが指導、1949 独立達成

ヴェトナム、1945. 8 ホー・チ・ミン、民主共和国の独立を宣言、フランスこれを認めず、1954 ディエンビエンフー、北緯17度線で南北に。アメリカが代わりヴェトナム戦争。1975 アメリカ最終的に敗退、南北統一。

インド、1947 インド連邦とパキスタンに分かれて独立。1948 ガンディー暗殺、1950 インド共和国、ネルー首相

マレー、1957 マラヤ連邦、1963 シンガポール・英領ボルネオと合体してマレーシア連邦、1965 シンガポール独立

中東・北アフリカ：1945 アラブ諸国連盟

1948 パレスチナ、イスラエル分割→中東戦争、問題はこんにちもなお未解決

エジプト、1952 ナセルら王制打倒、1953 共和国（エジプト革命）、1956 スエズ運河国有化→第2次中東戦争

モロッコ、チュニジア、1956 独立、アルジェリア、1962 独立

ブラック・アフリカ：1957 ガーナ、エンクルマ、1960 17 の新興独立国→アフリカの年
1963 アフリカ諸国首脳会議、30ヶ国参加、アフリカ統一機構（OAU）

しかしその後、多くが軍事独裁政権に。

政治的独立と経済的自立の困難

新興独立諸国の経済発展・新社会建設、多くはうまく行かず。←モノカルチャー、解放運動・解放革命＝戦争の傷痕、政治の指導者と経済の指導者：不足、腐敗、など、元宗主国の隠然たる力

1960年代から新植民地主義論盛んになる。独立させておきながら、新たに利用。

1970年代、ラテンアメリカで「従属の構造」の発見。

ラテンアメリカ：第二次大戦後、輸入代替工業化。成功せず。

1959 キューバ革命。武力による解放の可能性。1967 ゲヴァラの死で閉ざされる。

チリのアジェンデ政権。1970 左翼統一候補として小差で当選。人民連合を率いて世界初の議会制民主主義に基づく社会主義。アメリカ系銅産業の無償国有化、主要産業・企業の国有化、農地改革、等。73. 9. 11 軍・警察によるクーデタ。

従属の構造：衛生諸国、中枢諸国に構造的に従属させられている。

従属理論：近代化論の批判、とくにロストウ理論の批判。対等な同時出発でない競争。しかも、早く出発した方が遅れている国を支配し利用するため、遅れている諸国では成長どころか退歩が起こる。「低開発の発展」(フランク)。

やがて、世界システム論に発展。ウォーラステイン。従属の構造につながるような世界システムの発展が、近代資本主義によって最初から行われてきた。500年の歴史。

東アジアの経済成長

先例としての日本。

国連貿易開発会議 UNCTAD, 1964, G77, 新国際経済秩序 NIEO

新興工業諸国 NICs から新興工業諸地域 NIEs へ。韓国、台湾、(香港、) シンガポール
中進国論、従属理論の影響弱まる。さらに、ASEAN 東南アジア諸国の経済成長。

1979 中国の改革開放←1978. 10 中共 11 期 3 中全会

1989. 6. 4 天安門事件。民主化頓挫するが、その後経済成長

インドも 1991 以来、成長政策へ。東アジアから南アジアに成長が広がってきている。

相互移民と文化的闘争への拡大：カルチュラル・スタディーズ

植民地から解放された諸国で経済成長だけでなく文化的発展も。

サッチャー政権：公共投資の削減、労働組合の弱体化、国営企業の民営移管、インフレ抑制策(マネタリズム)などを実施。他方に、新左翼：労働者文化研究の伝統。サッチャーリズムの引き締めで旧植民地諸国へ。カルチュラル・スタディーズの展開。それらがイギリスや英語圏諸国にフィードバック。

文化のあらゆる面から旧宗主国、先進国、アメリカの支配を批判し、新しいアイデンティティを主張。研究なのか、自己表現なのか？ そんなことにこだわる必要があるか？

コロニーの摘発とポストコロニアリズム

インターナル・コロニアリズム論。イギリスとアイルランド問題。アメリカの黒人・少数民族問題。

フェミニズム：資本制と家父長制。ジェンダー論からセクシュアリティ論へ。

ポストコロニアリズム論：オリエンタリズム批判、サバルタンは語ることができるか？ スピヴァク、旧植民地諸国のなかに、植民地であったがゆえに無視され、独立後も無視されてきている膨大な人びと。インドのサティ、独立運動のなかの女性、その他いろいろ。こうしたサバルタンを無視して解放思想の自立を語るのは不適切。

西洋的視座の限界、脱構築の必要。この考え方が、ポストコロニアル社会だけでなく先進社会にも波及。無視されてきたさまざまなコロニーの発掘。その度ごとの思想の脱構築。

6 本当の市民社会はこれから

先進社会の行き詰まり

1970年代に、産油諸国の反発によって、それまでの経済成長を続けられなくなる。

ケインズ主義とハロッド主義の終焉

政府による経済調整+技術革新による経済成長、の限界

スタグフレーションの深刻化。Stagnation and Inflation.

ヴェトナム戦争に大量のドルをつぎ込み敗北したアメリカの責任。アメリカ内部の深刻な停滞。「タクシー・ドライバー」の例。

ヨーロッパはこれをみてアメリカからの自立の方向に進み、統合を進める。1990年代以降、ヨーロッパ連合へ。

日本だけが成長を続けられそうに見えたが、バブルにはまりこんで失速する。失われた10年へ。

新自由主義（ネオリベラリズム）の登場

1973. 9. 11 チリのアジェンデ潰しを機会に成長し始め、1979 イギリスのサッチャー政権、1981 アメリカのレーガン政権、1982 日本の中曽根政権、を中心に世界に広まる。

政府の調整（その背後に労働側の力）を廃して、市場にもう一度任せようとする。

規制緩和：前提としての労働側の押さえ込み。イギリス：サッチャーの対労組強硬姿勢、日本：国鉄民営化に始まる組合弱体化政策、など。

ソ連・東欧にたいしても押さえ込みの展望が出てくる。←ゴルバチョフの登場（サッチャーがいち早くゴルバチョフの可能性を発見したといわれる）。ペレストロイカは失敗し、やがてソ連東欧の崩壊へ。

中国は1978年から改革開放へ。

ハイエク Hayek, Friedrich August von, 1899-1992 の思想：ケインズと論争。『隷従への道』1944. 人間（的知）の不完全性を市場で。

フリードマン Friedman, Milton, 1912-2006, 市場主義をベースに、経済を貨幣量でコントロール。マネタリズム。

近代主義（モダニズム）の見直しと徹底：「未完の近代」

ドイツ思想では別の意味で近代主義（モダニズム）を見直す動き

ハバマス Habermas, J., 1929-

公共性の構造転換、から出発

ディスクール（理想的対話状況）としての近代の理念

そこからあらためて現代資本主義を批判する

経済・政治システムによる生活世界の植民地化

正当性をえるために福祉国家化→国家の財政危機

正統性の危機→危機管理→危機管理の危機

マルクス主義をその方向で再生させようとしていたのだが、ソ連・東欧の崩壊でその企図にも魅力がなくなる

他の行き方としてのポストモダニズム

他方、フランス思想はモダニズムを構造主義によって相対化した所から、その先にポストモダンの方向を見据えようとしていた。

アルチュセールからフーコーへ

アルチュセール Althusser, L., 1918-90, マルクス主義の構造主義的解釈。国家のイデオロ

ギー装置。家族、教育制度、マスコミなどをつうじて、「大文字の主体」が私たちを動かしている。

フーコー Foucault, Michel, 1926-84, アルチュセールの考え方をさらに発展させ、人は言説によって行動し、その言説は社会の構造に規定されている、と考える。その考え方で、近代＝合理主義の背後に隠されている非合理性を暴き、性に象徴される人間的・自然的の他のあり方を探ることをつうじて、近代を乗り越えようとする。

最後は、古典ギリシアの性に解放の可能性をみようとする。

ドゥルーズ Deleuze, G., 1925-95 とガタリ Guattari, F., 1930-92, : エディプス・コンプレクスが資本主義の源泉。偉大な王であり父であるような資本主義に、あくせく働き、やみくもに消費し、豊かになることに夢中になるようしつけられた機械（マシン）のような私たち。そこから解放されれば、人間には無限に多様な自由の空間がある。千のプラトール

近代のディシプリンにとらわれない多様な生き方の是認

そういう角度からの資本主義批判

ポストコロニアリズムからの批判

そのやり方にポストコロが不徹底を見いだす。

サバルタンをどうしてくれるのか？

もう一度ポストモダンも含む西洋思想の根底を問い、その限界を洗い出す必要

デリダを評価。明晰の現前：デカルトからフッサールへ。はっきりしていて曖昧でないこと、しかもそれが言語的に示されること、が真理だと思っている。西洋思想の限界。

しかし、曖昧な、言葉に表しにくい、真理もある。

言葉を持たない人びとにとってはとりわけそうだ。

サバルタンのなかに入り、識別しにくい差異を見逃さず、その重大性を吟味して、そこから視座を転換する必要

サティエの例

バドゥリの例

未市民と脱市民：サバルタンとマルチチュード

市民そのものを脱構築する

ブルジョワからシティズンへ

制度によって即自的にそうであるだけでなく、そうであることを自覚した対自的なシティズンへ。

自覚的行為によって資本主義を制御し、生産し、消費し、豊かになることにとりつかれた状態から抜け出して、自然との調和を取り戻した即自的かつ対自的なシティズンへ。

サバルタンを発掘し、即かつ対自的なシティズンの方向にサバルタンが主体化していくのを助ける

市民になったと思ったら脱市民化されていくのがマルチチュード

選挙制度の不備のため

大国の支配、新しい帝国の出現、などのため

マルチチュードも、脱構築された市民の方向にたえず市民化し続けていかねばならない。

市民とは、自治の方向にたえず自己を乗り越えていく人間

そういう人間が社会の多数派になっていくためにたえず努力を続ける

その意味で、本当の市民社会はむしろこれから

II 市民が社会をとらえる

1 全身で世界をとらえる

市民になり、なり直すために

こうして、われわれは、あらためて市民になり、くり返しなり直さなければならない。
市民とは、自らの生きる社会のあり方、行き方を自ら決めていく人間のことであったから、そのために市民は、自らの生きる社会をくり返しとらえなければならない。
全身でとらえなければならない。
社会をとらえるとはどういうことなのだろうか？

初身体への回帰

こういうことを言うとき、私たちはすでにある仕方で社会をとらえている。
いや、社会にとらえられている、といった方がいいかもしれない。
私たちは、生まれて育ってくるあいだに、しつけられ、教えられ、社会に生きようにつくられてきている。
社会化。アヴェロンの野生児 1797-1828。アマラ?-1921.9.21 とカマラ?-1929.11.24、インド・ミドナプール付近、ジョセフ・シング牧師。
だから、社会をとらえるとは、それをあらためてとらえ直すということである。
そのために、私たちはまず、初身体に回帰しなければならない。
社会化の成果が身体にまで染みついているので、それらを取り去ることまで含めて、初身体に回帰しなければならない。
厳密な意味で初身体に回帰することは、社会に生きていかなければならない以上不可能なことなのだが、できるだけそうなるうとしてみなければならない。
デカルトの方法的懐疑。
カントの理性批判。
フッサールの現象学的還元。
やや違った文脈ながら、これら以前からあって、もっと徹底していたのは禅の無念無想。
言い方は難しいが、これらは皆、できるだけ初身体に回帰し、そこから世界をとらえ直す方法であったと言っていい。
うるさくいうと世界は、自然と社会と文化とからなるが、ここではそれが一体化したものを社会と呼ぶことにしよう。
社会をとらえるために、私たちはくり返し、初身体に回帰しなければならない。

受けてきた教育の洗い直し

そのためにまず受けてきた教育を洗い直す必要。
学校前教育。
学校教育。
学校後教育。職場での教育。市民生活の場での教育。とくに後者に強く働きかけているマスコミの教育。いわゆる社会教育は狭い意味。
これらは、アルチュセールのいう国家のイデオロギー装置の効果。さらに徹底すると、フーコーの言説をつうじての社会の権力作用の効果。
それらの効果を徹底的に還元しようとしてみる。
知識、情報、データ。これらはどこでどのように教えられたか、あるいは学んだか、反省しやすい。知育の成果は洗い出しやすい。
これにたいして、これらをつうじてか、あるいは直接間接に教え込まれた倫理、道徳な

どは、身体にしみこんで無意識化していることが多いので、反省するのがもう少し難しい。徳育の成果はもう少し洗い出しにくい。

しかし、これよりもさらにむずかしいのは体育の成果。狭い意味での体育ではなく、もっと深刻な体育の効果。

フロイトの口唇期、肛門期、性欲のコントロールなど。

それをふまえて社会が、もっと大きなところから、言説の渦巻きをつうじて私たちの身体をつくってきている。

フーコー。監獄、狂気、そして社会全体を支えるセクシュアリテ。

習慣の束としての私

こうした文脈で考えると、プラグマティストの「人間は習慣の束」という命題にも深い意味が。ウィリアム・ジェームズ。ジョン・デューイ。習慣、衝動、知性。熟慮。

フーコーを受けたブルデューのハビトゥス。

社会的にばかりでなく、歴史的に形成されてくる私たちの身体。

これを初身体に戻すことは、実際にはほとんど不可能なこと。

しかし、それをくり返し試みなければならない。

それをたえず超え出ていく私

構造的に規定された習慣の束としての私をくり返し超え出ていこうとすること。

しかも日常生活のなかで。

サルトルの実存。『嘔吐』のロカンタンから『自由への道』のマティウ・ド・ラ・リュ（街の太郎）へ。しかしこれは、主意主義に走りすぎ。

その意味で実存主義は構造主義によって乗り越えられたかのようにいわれたが、フーコーやドゥルーズとガタリやブルデューなどが試みたことは、ある意味で構造主義のあとにそれをふまえて実存主義を再生することではなかったのか？

東洋的にいえば、日常生活のなかで禅を行い続けること。

座禅ではなく動禅。

超えながらたえず人間の世界に内在

当然のことながら、私がいかに私を、そして社会を、超え出ていこうとしても、私はそのことをつうじて人間の世界に内在。

出家してもそうなのだから、まして在家では。

というより在家で修行を続けることの方が大切。動禅。

言い方が抹香臭くなったが、私たちは、個々の社会——故郷、国、など——を抜け出すことはできるが、人間の世界そのものはけっして抜け出すことはできない。

たとえ宇宙空間に出ても。

「そこがロードゥス島だ。そこで踊れ！」

2 共同性と階層性の相克

社会の4つの基本相

初身体に戻ろうと務めながら、社会とは何かを全身で考えてみる。

みんな一緒に生きていること。

共同性。

にもかかわらず、上に立つ者と下に置かれる者がある。

階層性。

そうということが複雑に絡み合って、大きなまとまりをなしている。

システム性。

そのようなものとして、自然、直接には生態系、のなかにある。

人間とその社会は、どんなに暴れ回ろうと、孫悟空がお釈迦様の手のひらを抜け出られないように、地球生態系を抜け出られない。

生態系内在性。

このことをスミスは忘れていた。

Smith, C. W., 1979, *A Critique of Sociological Reasoning*, Basil Blackwell. (庄司興吉・武川正吾訳, 1984, 『社会学的理性批判』新曜社)

パーソンズやハバマスにおいてさえ、明確でなかった。

新生態学的パラダイム(NEP) (←→人間例外パラダイム HEP) の提起いらい、多くの人がびとが認めるようになったが。

共同性としての社会

共同性は共同体と呼ばれてきた。

バンド、ホルド、原始共同体、村落共同体、都市共同体、などは実体的。

共同的なものは社会が大きく複雑になっても残り続けるので、社会を現象学的に、あるいは構成主義的にとらえるためには、共同性といった方がいい。

社会を構成する契機としての共同性。共同の関係性の総体。

家族、家族連合、環節的社会。

自然分業、男と女、大人と子ども、年寄りと若者。

農耕・牧畜をするようになって初めて社会分業へ。

有機的社会。

社会は大きくなり、富んできて、階層性の基礎が。

階層化する社会

社会分業による内側からの階層化。階層性。階層的關係性の総体。

社会分業は自然分業を基礎にして起こる。体力の差、能力の差、など。

自然分業を基礎にしながら、生産力の向上とともに社会分業が進み、階層化が進んでいく。

しかし、これが顕在化するのには、社会と社会との衝突、つまり戦争をつうじてのことが圧倒的に多かったであろう。

部族抗争、リネージの形成、小国分立、国家間抗争、統一国家の形成。

日本古代史、大和朝廷の形成まで。氏族(ウジ)を中心とする。

日本中世史、戦国時代から幕藩体制の成立まで。家(イエ)を中心とする。

日本近世・近代史、黒船来航から近代国家の成立まで。藩閥から財閥、学閥へ。

これらの基礎に共同性の相克をつうじての階層性の形成。

階層社会と階級社会。階層差を基礎により上位のものによる下位のものの支配がおこな

われ、それが固定するのが階級社会。

階級社会と国家。この意味での国家はたしかに階級支配の手段。

階級闘争史観。「今日までのあらゆる社会の歴史は階級闘争の歴史である。」

社会膨張のメカニズム

共同性と共同性の衝突をふまえて階層化をくり返しながら、社会は膨張していく。社会発展ではなくて社会膨張。

包摂と排除の弁証法。図を参照。

奴隷制。古代奴隷制。近代奴隷制。

コロニアリズム。ポストコロニアリズム。

奴隷が内化され、階級社会となっていく例。古代日本から近世日本へ。同質性の高い社会へ。近代化（資本主義化）にともなう階級社会が顕著に。

奴隷が内化されず、固定して、カーストとなっていく例。古代のインド。近代化がなかなか進まず、進んでもなおカーストが問題に。

アメリカの近代奴隷制に基づく社会も、なかなか差別を克服できず。

民族と階級の起源

民族＝拡大した共同性。

文化＝生産様式と言語を中心とする。

そのなかに織り込まれて固定しかけた階層性が階級。

階級社会はだから民族を基礎に。

民族が民族に征服され、民族と階級とが一致するような場合にも、より上位の共同性が成立しなければ階級社会は維持できない。インドの例。アメリカの例。

文化的征服の重要性。イスラーム。中南米のカトリック。いずれも武力先行であったが。

オランダ以降の植民地主義は、その意味では、武力・経済先行の「唯物論的」なものであった。

階級闘争論が失敗した理由

階層性が共同性をふまえずに階級社会をつくるかのように考えたところ。

共同体の崩壊と資本主義の発展、というとらえ方自体が一方的。

村落共同体、あるいは前近代的共同性はたしかに崩壊するが、それを超えてより大きな共同性が形成されていく。

市民社会の二重の意味。ブルジョワ社会とシティズン社会。

市民社会と国民国家との関係もこの文脈で理解すべき。

ドイツ的な「国家と市民社会」でなくイギリス的な「市民社会とネーション」。ドイツでは、市民社会が遅れたがゆえに国家が理想化されてそのうえに置かれたが、イギリスでは、ブルジョワがシティズンを率いてネーションとしてまとまり国家をつくっていった。

フランスはその中間。ナポレオンの遺産。市民社会も強いが、国家も強い。

第二次世界大戦以前の日本はドイツよりももっと国家偏重。大戦後は市民社会化が進んだが、象徴天皇制の危うさ。

他方、第二インターの失敗。労働者の民族性を見抜けず。

コミンテルンはさらに悪い方向に。社会主義のインターナショナルリズムの背後に大ロシア排外主義。

第二次世界大戦後は、中ソ論争・対決をへて、中国が現実主義化、ソ連・東欧が崩壊。

グローバル化のなかで階級闘争史観および階級闘争論の力、きわめて弱くなる。

3 宗教・国家・市場・都市

平等と不平等の矛盾を緩和する

共同性＝平等、階層性＝不平等、の矛盾を緩和することは、社会を維持するために必須のこと。

いつのまにか生じた階層性＝不平等を、共同性＝平等を維持するために必要なことと納得する、納得しあう、納得させる、こと。

社会を維持するための合意 **Consensus** の形成。

というよりも、社会とはそういう合意そのものである。

デュルケムの集合意識。

宗教は最初の社会統治

そのために物語をつくって語り合う。その基礎に、実存としての人間の限界状況＝生老病死など、への思い。

神は私たちをこの地に送り、このように生きることを命じたもうた。

神話。

ギリシア神話。創世記。日本神話。など。

神話を全身体で語り合おうとすることから、儀式が生ずる。

儀式を行う時と所の特定。聖と俗の区別。聖職と俗職との区別。それまでに進んでいた社会分業の確認。社会秩序の形成。

神話、教義、教社（教会、寺社、など）、聖職、組織。

デュルケムの宗教論。

これは社会統治そのもの。

宗教の物化したものが国家

神話→教義のなかには、超越的なものと経験的なものとが混入。

超越的なものが経験的なものを統御しているが、経験的なものが増えるにつれ、相対的に自律の傾向。

宗教による社会統治のうち経験的なものが相対的に自律したものが、国家。

国家はいわば、宗教の社会統治的な面がもののように感じられるようになってくること。物化 *Verdinglichung*。マルクスの物象化 *Versachlichung*。デュルケムの「もののように *comme des choses*」の意味。

政教分離のはじめ。

しかし、そうなればなるほど、政治はその正統性を確保するため宗教を必要とするようになる。

王の誕生。超越的なものと経験的なものとを媒介する特異身体。

原初はシャーマン、卑弥呼の例。シャーマンからカリスマへ。

帝国の形成とともに、王から皇帝へ。

キリストの例。キリストは、「カエサルのはカエサルへ」と説いて影響力を広げた。政教分離後の宗教の影響力回復努力。

人間的自然としての市場

こうした経過の基底で、人間身体同士の交換＝交感と媒介物の交換の同時進行。やがて後者が膨らみ、経済的な意味の市場になる。そのなかで、人間身体も商品に。奴隷市場。売春市場。

自然分業から社会分業への展開とともに、交感と交換は共同性の範囲を超えて拡大。

農耕・牧畜の習得がさらにこれを加速。
征服による略奪も、奴隷化＝支配に変わってくる。
人肉嗜食 cannibalism・強姦から奴隷化して生産させる・労働力も再生産させる、へ。
交感・交換は原則として無制限に拡大。

妥協形態としての都市

こうして無制限に拡大しようとする市場を国家が自己維持のため、コントロールする必要。

市場の地域的限定、交換への課税、など。

管理しやすいように足下へ。都市の発生。

神殿、王宮などのまえに、王都、門前町、城下町、、、

王、神官、家産官僚、軍隊。

それらと農民たちとのあいだを媒介する都市民＝市民の発生。

王や王国の支配がゆるんだ都市で、市民の民主主義と文化の発生。ギリシアのポリス。
ただしかれらは、周囲の農村と奴隷に依存していたため、文化を消費するだけで生産のために応用せず。ヘレニズム世界に分散吸収。

その後の王国や帝国では市民たちは王や皇帝に支配される。古代ローマの「パンとサーカス」も含めて。

都市を中心とする社会のシステム化

都市と農村との分離。

都市・農村社会としての王国の相克。

王の王、王の王の王、、、の出現。

帝王と帝国の発生。Imperium, Empire.

この過程で、宗教の普遍化。普遍宗教、世界宗教の発生。

宗教は帝国から自らを差異化し、影響力を回復しようとする。

ブッダの解脱。孔子の努力。

キリストは「諸王の王 The King of Kings」として自らを差異化しようとした。

それらを取り込んで、帝国は膨張していく。

イスラーム：徹底した一神教による帝国形成の再現。

4 一次システムとしての帝国

都市の形成と文明

都市の形成は文明の創出でもある。

文化と文明：文化は人が進化を始めた時から始まっている

文明とは、農耕・牧畜による富の蓄積を基礎に、教社や王宮が建てられ、それらの前および周囲に市場、聖職者や家臣団の住居、商工業者の住居などが造られて都市の体をなし、それ（ら）を中心に社会の形態学的布置および構造が決められていくことをいう。

社会形態と社会構造：デュルケム社会学の意義

都市を中心に、社会の容積は増大し、動的密度も上がってくる。

熱い都市 vs. 冷たい都市：都市民とくに商工業者の活動が活発かどうか。

都市民の形成。外部からの収益で生きる市民たち。民主主義・思想・芸術も生産には生かされない。古代ギリシアのポリス。

皇帝に囲われ、飼育される場合も。パンとサーカス。古代ローマの例。

特異点としての皇帝の身体

文明は多くの場合、帝国の形を取った。

帝国はこの意味で、共同性と階層性の統一としてのたんなる階級社会を超えた最初の社会システム。

一次社会システム。

帝国の統治のイデオロギーは宗教、機関は国家。

両者を結ぶのが皇帝の身体。

皇帝の身体は階層性の頂点にあり、俗と聖、経験と超越を媒介する特異点。

シャーマンからカリスマへ。

カリスマの言は預言、すなわち人の口をつうじて発せられる超越者の言葉。

Imperium。その行き届く範囲が Empire。

それを頂点に家臣団からなる家産官僚制。

行政官（文官、貴族、マンダリン）と兵（武官、騎士、武士）の分離へ。ヨーロッパや日本の封建制ではこの再統一が起こる。

膨張の必然性と軍隊

帝国はそのイデオロギー＝宗教が普遍的であればあるほど膨張の必然性。

超越者の威勢を世界に広める。

それが文明化した世界での人の救いでもある。

そのために軍隊が膨張する。

鉄の兵器、軍馬、投石。やがて火薬が。中国・唐が最初。13-14 世紀からヨーロッパでも。日本では元寇が最初というが、本格的には戦国時代から。

守りの拠点としての堀：万里の長城、古代ローマの城壁、中世の城、など。

補給の基礎としての農業生産力

軍はたえず補給されなければならない。

食料と武器（軍馬も）。

それらの補給の基礎は農業（牧畜も含む）生産力。

それが続くかぎり、帝国は膨張しようとする。

Imperium＝軍事力。その限界は農業生産力。

帝国の興亡と文明の交錯

こうして、帝国は興亡をくり返し、文明は衝突し、交錯した。

ペルシア帝国（アケメネス朝） 550-330bc

ヘレニズム帝国、アレクサンドロス大王の東方遠征 334-324bc

マウリヤ帝国 c317-c180bc。マガダ国から。アショーカ王の時最盛。

秦帝国 221-206, 漢 202-8ad, 後漢 25-220, 隋 581-618, 唐 618-907, 宋 960-1127,

ローマ帝国 27bc-395, 西滅亡 476, 東-1453

イスラーム帝国、開始 610、ヒジュラ 622 メッカからメディナへ、アラビア半島の統一
630、ウマイヤ朝 661-750, アッバース朝 750-1258

モンゴル帝国 1206-71

元帝国 1271-1368, 明 1368-1644, 清（当初後金） 1616-36（改称） -44（明滅亡） -1912

オスマン帝国 1299-1922

アメリカ大陸にも帝国の興亡はあった。

マヤ、古典期 300-900。アステカ、14C-1521、コルテス。インカ、13C-1533、ピサロ。

人間的自然としての市場の拡大

しかし、文明の交錯は帝国の衝突によってばかり進んだのではない。

都市は、自然発生的に広がる市場を国家（王、皇帝）が統制しようとして生じたものだといったが、文明の展開とともに市場はさらに広がり、シルクロードや海のシルクロードに代表されるような線状市場が地表や海上に伸びていったのである。

そして、こうした線状市場の結節点となっていた都市のうちのあるものから、帝国＝一次社会システムの限界を突破する新しい社会システムが現れてくるのである。

帝国の統制が弱くなり、商工業によって自ら生きていこうとし始めた都市が自治都市となり、新しい社会システムへの道を開いていく。

5 二次システムとしての市民社会

個人としての市民

自治都市が成長し、聖職者や諸侯と戦うために国王（絶対君主）と連携し、やがて絶対君主と戦って市民社会を創っていく過程で、市民は個人となる。

個人：生まれながらにして自由で平等な人間

人権の担い手、自由権から参政権へ

この過程で市民内部の身分制度との闘争：商人ギルド、同職ギルド、ツunft闘争、親方・職人・徒弟という身分序列との闘争

エンクロージャーによる「二重の意味で自由な」労働力の流入が市民内部の身分制も洗い流していく。

宗教の内面化から無神論へ：科学技術の発達

宗教改革。

カトリックの外的な組織に生じた腐敗を批判し、信仰心を信者の内面に取り戻そうとする。プロテスタンティズム。

形成途上の市民が、内面から固められ、個人化する。

神と向かい合う実存：パスカル、キェルケゴール

合理的思考でそこから抜け出していこうとする人間：デカルト

合理的思考を汎神論的に広げようとする人間：スピノザ

デカルトの線は、パスカルが見抜いていたように究極的には無神論につながるが、そこから科学技術が出てくる。

プロテスタンティズムの倫理から資本主義の精神への移行はこの経営ヴァージョン。

スピノザは今日見直されている。合理主義を汎神論的に現在化することによる生態学的視座の獲得。東洋思想との関連。

国民国家の形成と民主主義の普及

個人化した市民たちは、新たな共同性として国民を立ちあげ、そのうえに国家を立て直す。

国民国家 Nation State

国家はそれ以前の国家から自らを区別するため、宗教と自らを分離する。

政教分離。

そのうえでそれを市民民主主義のうえにおく。

君主制を残したままの市民民主主義：イギリス、日本

最初から共和政の市民民主主義：アメリカ、

共和制と君主制（帝政）とのあいだを往復したあげく共和政に定着した市民民主主義：フランス、

君主制（帝政）から共和制に移行した市民民主主義：ドイツ、イタリア

君主制（帝政）から共和制への移行の過程でプロレタリア革命と国家社会主義を経験した市民民主主義：ロシア

普遍的市場化と止めどない産業革命

国民国家を押し立て、市民社会は市場を普遍化していく。

大航海時代以降のヘゲモニー争い：スペイン、ポルトガル、オランダ、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカ、イタリア、ロシア、日本

普遍化する市場を視野に産業革命：

18世紀後半のイギリス

19世紀前半のフランス

19世紀後半のドイツ、アメリカ、日本

世界市場と産業革命によって生産様式は一変：農業資本主義・商業資本主義から産業資本主義へ

生産力の無限増大の可能性が出てくる。←土地と気候の拘束からの解放

第一次社会システムから第二次社会システムへ

科学技術、政教分離、市民民主主義、産業資本主義

資本主義による階級分裂と市民民主主義との矛盾：一株一票制と一人一票制

労働運動とプロレタリア（労農）革命の展開

普通選挙制→完全普通選挙制への運動：既述

20世紀の経験をへた第二次社会システムとしての市民社会

科学技術、政教分離、市民民主主義、資本主義 or 社会主義 or 第三の道

巨大化する都市と個人の匿名化

市民社会は都市の原理を社会全体に広げたものなのだが、都市・農村の形態学的布置はなお残り続ける。

そのなかで都市が肥大、巨大化。都市間流動性の増大にともなう共同性の相対的弛緩

背後に官僚制の肥大（M.ウェーバー）：形式的合理化と実質的不合理化

社会分業の拡大・深化（デュルケム）：アノミー

社会的疎外で原子化しかける市民：労働による疎外から社会的疎外へ

巨大都市のなかで市民たちは、個人性を失って、あるいは個人性を獲得しきれないあいだに、匿名化し、原子化する。

大衆の登場。選挙制の拡大のなかでの大衆。合理性のなかに非合理性が侵入。

大衆民主主義。ファシズムの台頭。

アメリカのような民主主義も安泰とはいえなくなる。

膨張する国民国家の競合へ

そうした問題を抱えながら、膨張する国民国家同士が、世界支配のヘゲモニーをめぐって競合する。

帝国主義の時代

帝国主義戦争としての第一次世界大戦

ブロック化の時代：持てるものと持たざるものとの対立、持たざるもののファッショ化。

早熟的に社会主義化した社会の全体主義化、スターリニズム。

ファシズムとの対抗における民主主義とプロレタリア民主主義の連合。

第二次世界大戦

民主主義（資本主義）と人民民主主義（国家社会主義）の対立：冷戦

勝敗は、どちらがより市民社会になっていたか、によって決まった。

グローバル化は市民社会普遍化時代の始まり。

大衆化した市民の再市民化がどのように起こるか？

6 社会の生態系内在性

文明と環境破壊

市民社会がここまできるとまでに、環境破壊が急速に進行し、社会の生態系内在性にだれもが気づかざるをえなくなった。

社会はもともと生態系から立ち上がっていたのだ。

農耕牧畜を覚え、文明を立ち上げるまでの人間は、そのことに無意識のうちにも気づいていた。

モリモの祭礼。

コミュニタスとストラクチャー、ハレとケ。

文明はすでに環境破壊の始まりであった。文明と砂漠化。生態系の変化で滅びた文明。

それでも農業を基礎とする文明の膨張力には限界があったから、環境破壊もある限度内でとどまっていた。

産業革命と環境破壊

産業革命を基礎とする産業文明——第二次社会システムの経済基盤——は、生産力の歯止めをはずすと同時に、そのことによって環境破壊の歯止めをもちあわせた。

工業による環境破壊の歴史

軽工業による環境破壊

毛織物業→エンクロージャー「羊が人間を」

綿織物業→賃労働者化とモノカルチャー

これらによる人間破壊：エンゲルス『労働者階級の状況』、細井和喜蔵『女工哀史』

重工業による環境破壊

木炭のための森林伐採、裸の山、洪水

製鉄、製銅、アルミ精錬などによる公害：排煙、排水、廃棄物

鉄道敷設、機関車走行による公害：鉄と石炭

化学工業による環境破壊

排煙→大気汚染

排水→水質汚濁

石油化学工業によるこれらの拡大

第二次世界大戦後の経済成長と環境破壊

コンビナート：日本の例、臨海工業地帯による素材型重化学工業の展開、石油と鉄、原料を輸入して半製品を輸出、投資が投資を産み、未曾有の経済成長へ

その反面としての公害：水質汚濁、大気汚染、土壌劣化、有害浮遊物、騒音

水俣病、イタイイタイ病はコンビナート以前の公害

四日市喘息、全国の工業都市へ

住民運動、三大公害裁判

自動車産業：産業公害から都市公害へ、工業都市喘息から大都市喘息へ

生活廃棄物：汚水、ゴミ、など。都市公害の拡大

南北間格差から地球生態系の危機へ

南北格差を前提にした先進諸国の公害輸出

公害型産業を規制のない（緩い）途上国へ

廃棄物の公海投棄

廃棄物の輸出

途上国の工業化努力

モノカルチャーからの脱却

輸入代替工業化

森林伐採

公害型産業の強行

大都市形成→人口集中→農村破壊→人口集中→スラムの拡大→インフォーマル・エコノミーの拡大→環境破壊から人間破壊へ

先進国も途上国も、産業のため生活のため→化石燃料の大量使用→二酸化炭素の大量発生→温室効果→地球温暖化

少子高齢化で逆照射される人口爆発

豊かな社会→栄養改善・医療改善・社会保障の普及→平均寿命の伸び→社会の高齢化

子どもの意味の変化：労働力、跡取り、介護者としての意味小さくなる→少子化

先進社会の少子高齢化→人口減少へ

途上国では依然として出生率が高い

貧困、飢え→乳幼児死亡率の高さ

労働力としての子ども、扶養・介護者としての子ども

産児制限の未普及

女性差別：自己決定権の欠如

しかし、長い目で見れば、途上国の産業化・経済成長とともに、少子高齢化は世界的な趨勢となっていく。

生態系内在性の自覚化へ

以上をつうじての生態系内在性の自覚

外部環境＝自然についての自覚から、内部環境＝身体についての自覚へ

生態系についての対策は、社会が環境として自然や身体を外部化してきたものを内部化するということ

生態系のできるだけ多くの部分を取り込んだ社会システム

→第三次社会システムの予兆：帝国→市民社会→？？社会

社会・生態システム？

倫理が問題となってくる

環境倫理、再生産倫理、医療倫理、世代間倫理、→仏教倫理の見直し？

宗教→科学技術→科学技術をふまえた倫理

III 変わりゆく現代社会

1 新しい帝国か？

ハートとネグリの議論

以上をふまえて、私たちの生きる世界、現代社会をとらえると、どういうことになるか？
手がかりとしてのハートとネグリの「帝国」論

Hardt, M. & Negri, A., 2000, *Empire*, Harvard University Press. (水島一憲他訳, 2003, 『〈帝国〉：グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』以文社)

グローバル化以後の世界に、世界中に拡散した生政治的生産 bio-political production をふまえて、新しい世界秩序＝新しい世界支配のシステムが成立している。

生政治的生産とは、物資の生産と供給ばかりでなく、それをふまえて展開される諸言説の流通をつうじて、私たちの身体がある生き方をするように仕向けられ、そのような生き方を再生産していくような支配のシステムが創出され、維持されていくこと。

アメリカ的な大衆消費の生活が、情報化と電子化（コンピュータ化）とによって世界に広められ、ファストフードを多食し、スーツやジーンズを着て、飛行機や車でホテルに泊まりながら移動し、テレビやパソコンやケータイで情報をやりとりしつつ仕事と生活を展開していく人びとの社会が広がりつつある。

こうした社会のうえにおのずから成り立つ、ある生き方を普遍的とし、それに従うよう要求する至上命令 Imperium の貫通するシステムが「帝国」。

「帝国」は、アメリカ自身をも超え、もはや外部をもたない。

このシステムに支配されている相対的に下層の人びとが多衆 Multitude。

マルチチュードは、うえのような仕事と生活を求めて遊牧民のように移動せざるをえず、不満をかこって集まったところで爆発する。

そのような人びとが地球を再領有するとき、新しい社会システムが生まれる？

誤解されやすい「帝国」の概念

ハートとネグリの議論：新しい視点を出しているが、「帝国」の概念は誤解されやすい。

古代いらいの帝国は、農業生産力を基盤に、皇帝という、超越的なものと経験的なものとを媒介する特異身体によって統合された一次社会システム。

新しい「帝国」は、電子情報市場化をふまえた新たな生産力を基盤に、主要国民国家間の角逐をつうじて生まれたもの。

市民社会の展開の途上に現れた新しい世界支配のシステム。

歴史的に位置づけると、

大英帝国：産業革命をふまえて成立した、初めての、市民社会を基礎とした世界支配システム。帝国主義の先駆。

帝国主義の時代：それにフランス、アメリカ、ドイツ、日本、ロシア、イタリアなどが対抗し、相互の対立から第一次世界大戦へ。ロシアの社会主義化＝ソ連。

戦間期：持てる帝国主義（民主主義）と持たざる帝国主義（ファシズム）とのブロック化をめぐる争いにソ連（プロレタリア民主主義）が絡んできて、第二次世界大戦へ。民主主義とファシズムとの争い。

冷戦期：アメリカ帝国（主義）とソ連社会帝国（主義）との核軍拡を主要手段とする抗争。資本主義と国家社会主義との争い。ブルジョワ民主主義とプロレタリア民主主義との争いが、市民民主主義と全体主義の争いであったことが判明し、前者の勝利へ。

ポスト冷戦期：アメリカが唯一の超大国化。消費社会的生政治生産と市民民主主義とをふまえた新しい「帝国」。

少なくとも新帝国というべき

以上にいう帝国は、帝国主義の帝国も含めて、不完全とはいえ市民社会を基盤にしている点で、古代いろいろの帝国とは異なる。

新しい社会システムが古い帝国に自らをなぞらえようとする動き。

しかし、現代社会を理解するためには、帝国と市民社会とのあいだをはっきりと理論的に区別し、ポスト冷戦期の新しい世界支配システムについては少なくとも新帝国というべき。

社会の4つの位相から理解する

新しい世界支配システム、あるいはその基礎にできてきていると思われる新しい社会システムをどう理解するか？

IIで論じた社会の4つの位相から見た場合。

共同性：新帝国は、米ソ冷戦の終結をふまえて、少なくとも大規模核戦争の不可能視のうえに生まれた。消極的共同性の確認。しかし、米ソによる相互牽制がなくなったことから、パレスチナ問題はかえって解決されがたくなり、第三世界、旧ソ連東欧圏には、民族紛争とみられる紛争が多発している。

階層性：新しい世界支配システムのもとでは、旧ソ連東欧の国家と経済がひとたび破綻したことや、東アジアで中国、南アジアでインド、南アメリカでブラジルが伸びてきたことなどのために、階層性が大きな構造変動を起こしている。しかし、それらをふまえて、北アメリカ、ヨーロッパ、および日本が世界再制覇の動きを続けてきたため、取り残されつつあるブラック・アフリカやイスラーム最貧国などとの格差は広がってきている。

システム性：主要国サミットに象徴される主要国支配。国連改革の停滞。NGOsの力はまだまだ。

生態系内在性（自然）：京都議定書1997。アメリカの離脱2001。ロシアの打算2004。EUは頑張っているが保守化の傾向も。日本は明確な行為をなしえていない。CO₂の量を2008-12年に1990年比で-6%にしなくてはならないのに現在+8%。

生態系内在性（身体）：人口爆発と少子高齢化。途上社会と先進社会の格差に両性関係（ジェンダー）と少数民族・移民問題（エスニシティ）が絡む。先進社会化して女性解放が進むと高齢化が進むが、エスニシティ問題が大きいところでは必ずしも少子化は進まない。日本の特殊性。

問題から歴史をへて構造へ

以上について、あらためて、具体的に提起されている問題から検討し直してみる。

問題には必ず、それがなぜどのようにして起こってきたのかという歴史があるから、それを追究していけば問題を起こすにいたった現代社会の構造が明らかになってくる。

意味と戦略と主体の発見

さらにその構造の意味を問いただせば、それを転換する戦略も見えてくるはず。

その過程で、その主体となる人びとのことも明らかになってくるであろう。

IIで展開した理論を具体的な現代社会分析に適用する手続き。

2 戦争の拡散と平和の意味

問題：局地紛争からテロリズムへ

冷戦終結後、アメリカ中心の世界秩序のもとで、局地戦争や民族紛争が頻発するようになった。

核軍拡競争も、縮小はしたものの、臨界前実験など形を変えて、隠然と継続。1998 年、インド、パキスタンが核実験を行い、2006 年には北朝鮮も実験。

そのなかで、アメリカを標的とするテロリズムが広まり、2001.9.11 を境にさらに全地球に広まる。

テロリズムの世界各地での頻発。

1993.2.26、世界貿易センタービル爆破事件（アルカーイダ）。1997.9.18、ルクソール事件（アルカーイダ）。1998.8.7、駐ケニア及び駐タンザニア・アメリカ大使館爆破事件（イスラム聖地解放軍）。2000.10.12、米艦コール襲撃事件（アルカーイダ）。2001.9.11、アメリカ同時多発テロ事件（9.11 事件、アルカーイダ）、2002.10.12、バリ島爆弾テロ事件（ジェマ・イスラミア）。2004.3.11、スペイン列車爆破事件（アルカーイダ）。2005.7.7、ロンドン同時爆破事件（アルカーイダ）。2005.10.1、バリ島爆弾テロ事件（ジェマ・イスラミア）。2006.7.11、ムンバイ列車爆破事件（ラシュカル＝エ＝クァッハルが犯行声明）。2007.6.30、スコットランド・グラスゴー空港における爆破事件。

歴史：冷戦終結とソ連東欧解体の余波

民族紛争は自由主義(資本主義)世界では 1950 年代から広まっていた。アメリカの公民権運動、カナダ・ケベックの独立運動、イギリス・北アイルランドの独立運動、スペイン・バスク地方の独立運動、など。

これらに加えて民族紛争や局地戦争が激増した第一の原因は、米ソの冷戦が終結し、対立し牽制しあっていた両大国のはざまに、権力の相対的な空白が生まれたこと。

湾岸戦争 1990。イラクがクウェートに侵攻。

パレスチナ紛争：和平から混迷へ。北欧平和外交の介入(オスロ合意 1993)。ラビンとアラファトの和平。ラビン暗殺 1995.11.4 と再混迷。

ソマリア、リベリアなどアフリカ諸国の紛争。

第二の原因は、ソ連東欧が解体し、内部に封印されていた民族紛争が表面化したこと。バルト 3 国の独立。ウクライナの独立。中央アジア諸国の独立。チェチェンの紛争。

旧ユーゴスラヴィアの解体と一連の民族紛争。クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、コソヴォ。

この間に、イスラーム諸国へのグローバル化の影響が深まり、テロリズムが世界各地で頻発。上記参照。

構造：アメリカの超大国化と一国主義的傾向の出現

こうしたなかで、アメリカは、旧ソ連の核兵器や原潜が中小諸国に渡る可能性を最小限に抑えながら、自らの核軍備態勢を縮小しつつ効率化し、世界を軍事管理網のなかに収めようとしてきた。

核軍産複合体の効率化。

それを前提に動く多国籍企業 or 世界企業：石油産業、(自動車、電気、精密機械)、情報産業、など。

グローバル化を進め、世界を自らに発した生政治的生産の支配下に。

グローバル化：電子情報市場化

生政治的生産の普遍化と民主主義というインペリウム→一国主義的傾向

これにたいして、アメリカ的消費文化と形式民主主義を受け入れられないイスラーム圏の人びとから反発が起こり、テロリズムへ。

9.11 でテロリズムがアメリカ本土を直撃するまでになったことから、アメリカは「テロリズムとの戦争」へ。

2001 アフガニスタン、2003 イラク。

結果としてのテロの拡散。

意味：新帝国の軍事化とテロリズムのグローバル化

アメリカから立ち上げられた新帝国が、ふたたびアメリカに引き寄せられて軍事（帝国）化し、古いアメリカ帝国主義批判を生き返らせるような事態となっている。

民主主義をインペリウムとする軍事帝国：民主主義とは反対の手段で民主主義を達成しようとする矛盾。

これに対抗して、テロリズムがグローバル化してきている。

背景にサバルタンとマルチチュードの増大。

サバルタン：5世紀にわたる欧米日帝国主義・植民地主義の世界支配からまだ抜け出られないでいる人びとの大群。未市民。

マルチチュード：新帝国の台頭で、一度獲得した主権を空洞化され、アパシーに見舞われる多衆。脱市民。

サバルタンとマルチチュードの大海のなかで、テロリズムが無限に根を広げる可能性。

リゾームのように。リゾームは地球社会の根茎であるが、だからこそ地球的規模のテロリズムの温床にもなりうる。Cf, ロシア・ナロードニキにとってのナロード（人民）。

戦略：軍事帝国とテロの同時制御としての平和

アメリカにその愚を理解させる。

日本の役割：どこまでアメリカ追随を続けるつもりなのか？ 平和憲法を生かし、存在理由を示す。

中国の役割：経済成長を続けており、いまだに関心はその範囲に？

イギリスの役割：ブレアはブッシュの戦争政策に乗りすぎたが、イギリスにはアメリカを押さえてきている面もある。

保守化したドイツとフランスの役割：かえって影響を与えられる可能性も？

インドはもっと声を上げてもいい。←ガンディーの祖国。しかし、対立の歴史から、かえってイスラームとは話しにくいのか？

カギは市民化するサバルタンと再市民化するマルチチュード。

主体：非暴力の地球市民

そのために歴史を振り返り、生かす。

ガンディーの非暴力主義。

マーティン・ルーサー・キングとアメリカ公民権運動。

ヴェトナム：アメリカに抗議する僧たちの焼身自殺。

テロから自爆テロへ

抗議の意味だけでなく、敵にできるだけ損害を与えようとする傾向へ。

抗議の意味の減殺。泥沼化の傾向。

ジハード概念の影響？

どうやって非暴力に戻すか？

戦後日本の市民たちの平和憲法をふまえた非武装中立運動を再生させる。

3 経済成長と貧富の格差

問題：格差の縮小と拡大

先進地域の相対的停滞。

日本のバブル崩壊。

アメリカの情報バブル：軍事帝国化によるストップ。核軍産複合体の自己主張。

EU の拡大による停滞：半途上諸国の抱え込み。

東アジアの経済成長：NIEs から ASEAN をへて中国へ。

旧ソ連東欧圏の市場経済化とロシアの成長。

インドの経済成長。

ブラジルの経済成長。BRICs 論の登場。

しかし、これら諸国の経済成長はいずれも巨大な内的格差の拡大をとまなっている。

イスラーム諸国の階層化とアフリカの停滞。

イスラーム諸国：産油国と非産油国の格差拡大。

アフリカにたいする日本の試み：TICAD: Tokyo International Conference on African Development, I 1993, II 1998, 閣僚レベル 2001, III 2003, AATIC 2004, 平和の定着 2006 アデイスアベバ、「持続可能な開発のための環境とエネルギー」閣僚会議 2007 ナイロビ, IV 2008 横浜。

歴史：大国的現実主義の勝利と問題点

ソ連の失敗・崩壊と中国の成功。

改革開放。文化大革命への反動とトウ小平の現実主義。市場社会主義へ。

インドやブラジル、これに見習い始める。

ロシアもやがて。

ブラジルおよび中南米はかつての従属理論の「祖国」。

アジア・ニース、アセアン、中国の発展がこれらを変えてきた。

その代わり内部に巨大な格差。

社会主義を放棄した「社会主義」国。

それが政治的にはなお「社会主義」体制：20世紀から引き継いだ大きな課題。

南北問題から南北・南南問題へ。

構造：サミット体制・安保理体制・中間地帯・アフリカ

サミット体制：アメリカ、日本、ドイツ、フランス、イギリス、カナダ、イタリア。

安保理体制：アメリカ、イギリス、フランス、ロシア、中国。

その他の西ヨーロッパ先進諸国。

東南ヨーロッパ諸国：EU への参入をねらっている。

ロシアはサミット体制に食い込もうとしてきている。

中国は、安保理常任理事国の地位を守りながら、経済成長に専念しようとしてきている。

中間地帯：経済成長しつつある他の途上大国：インド、ブラジル、アセアン。

インドは、核武装国の仲間入りをしながら、経済成長を続けてきている。

ブラジルは、中南米を代表して、経済成長を続けてきている。

アセアンは日本と中国に連携を呼びかけて、東アジア共同体を創ろうとしてきている。

中間地帯としてのイスラーム諸国。

富裕な産油国。極貧な非産油国。

アフリカ

マダガスカルと南アフリカをのぞくブラックアフリカは極貧。
極貧地帯の多くがイスラーム。

意味：多頭龍の尻尾切りか？

文明の衝突（ハンチントン）？

資本主義と社会主義の対決からキリスト教文明とイスラーム文明の対決へ？

儒教圏、仏教圏はほぼ近代化に適応した。かといって、順応したかどうかはまだ分からないが。

これにたいして、たしかにイスラームは旧帝国の残滓をもっとも強く残している。

宗教による社会統合。

しかし、現実主義の伝統も。クルアーンの墨守か、発展的継承か？

それを前提に、イスラームとアフリカを切る？

しかし、人口大国の内部に生じてきている巨大な格差はどうする？

「社会主義」中国がこれをどこまで許せるか？

インドはカーストを克服できるか？

ブラジルは？ 人口 1.9 億。カルドーズ政権からルーラ政権へ。2004, GNP 世界第 9 位。2007, IMF への債務を返済し、債権国に。クリオージョ資本主義ではないのか？

南米の人種階層性：クリオージョ Criollo、メスティーゾ Mestizo、ムラート Mulatto、サンボ Sambo

世界はイスラーム最貧諸国とアフリカ最貧諸国(両者はオーバーラップしている)の現実に向き合わねばならない。

戦略：人口大国の中太り化と低開発地域の集中援助

中国の日本化？ 「市場社会主義」の成長を現政治体制でどうコントロールするか？ 中間層を拡大させ、安定定着させられるか？ 漢民族中心主義の克服は？

インドの日本化？ 準社会主義体制は克服したか？ 資本主義の発展をコントロールする理念は？ カーストと宗教の問題（ヒンドゥー教を中心とする）は克服できるか？

アセアン成長諸国の日本化：シンガポール、タイ、フィリピン、ヴェトナムなどとともにマレーシア（人口 2700 万）、インドネシア（人口 2.4 億）のイスラーム諸国も。

イスラーム貧困諸国への援助。パキスタン、アフガニスタン、イラン、イラク、シリア。

ブラック・アフリカ諸国への援助。宗教の問題：イスラーム。

中南米貧困諸国への援助。宗教の問題：カトリック。

主体：節制する地球市民

地球市民は節制しつつ、あらためて市民化の意味を考えなければならない。

非西洋圏の経済成長が日本からアジア・ニーズに広がり、中国からインドへと広がって、ブラジルやロシアを巻き込みつつある事態をどう考えるのか？

儒教や仏教はグローバル化に適応したと考えて良いのか？ ヒンドゥー教は？ イスラームも適応するところはしてきている。何が引っかかってきているのか？

市民は、帝国の時代から市民社会の時代になってもなお生きる宗教の問題をどう考えたらいいのか？ グローバル化による科学技術支配のもとで。

政教分離の意味。信教の自由の意味。無神論の意味。まず市民化を考える。

そのうえで、科学技術を超える世界観の必要性を問う。「人はパンのみに生きるにあらず」といわれたことの意味。これには、脱市民化されて再市民化の必要に迫られている先進社会の市民たちもかわらざるをえない。

4 二の次にされる環境問題

問題：歯止めのかからない地球環境破壊

酸性雨：工業化とともに広がったが、1985年ヘルシンキ条約で硫黄酸化物、1988年ソフィア議定書で窒素酸化物、1994年オスロ議定書で硫黄酸化物が規制。しだいに沈静化へ。

有害廃棄物の越境移動：1989年採択、1992年発効のバーゼル条約で規制され、しだいにリサイクルされるようになってきているが、なお問題。

オゾン層の破壊：ホール 1982年発見。1987年、モントリオール議定書。2000年を境に縮小傾向。

砂漠化：世界の砂漠の面積は19-34億ヘクタール(UNDP, 2006)。世界の乾燥陸地の41%で世界人口の約3分の1、20億人以上が暮らしていて、砂漠化はその10-20%で生じている(ミレニアムエコシステムアセスメント, 2005)。(鳥取大学乾燥地研究センター)。

森林減少：世界の陸地面積130.6億ヘクタールの約30%、38億ヘクタールが森林面積。これらのうち、アフリカや南アメリカで減少が進んでいる。

生物多様性の減少：これまでに発見された動植物種は174万種。未発見ものを含めると2000万種に達するのではないかとされている。これらのうち、野生絶滅も含めて動物種で726種、植物種で90種が絶滅。動物種の13610種、植物種の822種が絶滅のおそれ。

地球温暖化：二酸化炭素濃度、20世紀をつうじて約280ppmから368ppmへと31(±4)%増加。全球地表面気温0.6(±0.2)度上昇。日本でも平均1度上昇。2005年のCO₂平均濃度は対前年比+2.0で379.1ppm。(ppmは体積比で100万分の1、気象庁、二酸化炭素濃度の経年変化)

歴史：人口大国の経済成長とアメリカの経済および戦争

1970年代までは米欧日の経済成長。とくに日本。コンビナートづくりをつうじての素材型重化学工業による経済成長。鉱山、旧式化学工業などに加えて典型的公害産業。

住民運動などによる抗議を受けて廃棄物を公海投棄、途上国に輸出、さらには公害型企業そのものの途上国輸出。

これらを受けて、1970-80年代、アジア・ニーズ伸びる。韓国、台湾、香港、シンガポール、マレーシアなどに環境破壊広がる。1990年のウルサン。

これらに1980年代後半から、中国、インド、ブラジル、ロシアなどの人口大国が経済成長に梶を切り、加わってくる。工業化の設備、素材など旧式のため、猛烈な勢いで公害広がる。1979年の中国、1985年のロシア、1998年のロシア、カザフスタン、ルーマニア、1998年のインド。2004年の中国東北部。2005年の中国上海、杭州。

アメリカが1980年代の情報革命をへて、90年代に経済成長。

それでも、クリントン・ゴア政権の時代1993-2000にはまだ環境政策を意識していたが、ブッシュ政権2001-2009になって成長優先、環境軽視政策へ。京都議定書からも離脱。

9.11事件以降は、「テロとの戦争」を大義名分に戦争政策に傾斜。2001.10-アフガン戦争。2003.3-イラク戦争。←石油産業ばかりでなく、生き残っている軍産複合体の圧力。

構造：新帝国・核軍産複合体・多国籍企業・成長国家群

新帝国がグローバル化に乗って世界に電子情報市場化を広げる。電子情報市場化は、大衆消費市場化である点で環境破壊を進めるが、電子情報化をうまく制御すればそれを少なくする方向に向け変えていくことも可能。

しかし、「テロとの戦争」とともに、新帝国は旧式な軍事帝国に傾斜。ただし、戦争の装備と方式は最先端技術の利用。

生き残った核軍産複合体：兵器の性能を維持し、改良しつつ、自らをスリム化しつつ高

度化していくために戦争を続けなければならない。アメリカを動かしてアフガニスタンやイラクへの戦争を進め、戦争の被害者を出すばかりでなく、環境破壊を広げてきている。

多国籍企業：石油産業はアメリカの「テロとの戦争」に乗っている。その他兵器産業を取り巻く重化学工業や機械工業も。電子情報産業ですら。これには軍事化や戦争政策やそれらによる環境破壊を公開し、抑えていく可能性もあるのだが、その面は十分に発揮されてきていない。

成長国家群：成長するにつれて軽工業から石炭・石油多消費の重化学工業に重点が移ってきていて、環境破壊を進めている。自らの成長に重点を置いており、新帝国の軍事化・戦争政策を正面切って批判しえないでいる。

この下に依然として前からの三角同盟も。多国籍企業、中小国家、国内企業。

これらをつうじて全般的に、無秩序な工業化、産業化、大都市の形成、農村破壊、スラムの拡大が続いている。

意味：近代的生産・生活様式の現代化とグローバル化

大衆消費の電子情報化は近代的生産・生活様式の現代化。資本がそれまでの共同性を破壊して個人を生み出し、それらを賃労働として雇用して生産をおこなう。資本はそれを社会の名においておこなうが、資本を規制する国家は微力。また資本は、生産の効率を上げるため科学技術を利用して労働者を搾取し、人間文化と自然との関係を疎遠にしていく。貧困や社会的混乱が広がるばかりでなく、環境破壊が進む。その方式の現代化。

それが地球的規模に広がってきているのがグローバル化。

社会と個人との分裂（資本主義）はかつてなく徹底されてきており、

文化（とくに科学）と自然との分裂（産業主義）もかつてなく徹底されてきている。

しかし同時に、電子情報化にはこれらを克服していく面も。

ネットワーク化、エネルギー消費の最適化、

民衆（サバルタンやマルチチュード）の側からの新たな生活単位：共同性の形成が新帝国システムを克服していく基盤を広げる可能性も。

戦略：電子情報大衆消費社会の普遍化と生活様式の画一・多様化

電子情報大衆消費社会普遍化の波に乗る。

乗ることを拒否する権利も認める。理由（貧困＋宗教＋？）を考えながら、納得して乗る道を開いていく。

生活様式はひとたび画一化するが、そのなかにやがて無数の小さな共同性が生まれ、多様化してくる。←各国、各民族、各地域の文化、など。

そのなかに波に乗れないでいる人びとを吸収していく。

小生活単位、小文化は、農業化（スローフード化）と電子情報化を結びつけて環境親和的に。こうしてできる無数の新しい共同性で地球大の消極的共同性を積極的なものに転化しつつ、複雑に重層する階層性を辛抱強く緩和していく。

主体：ネットワークするヒトとしての市民

ショッピング・センターAEON に対抗する市民スーパーの例。高齢者に焦点を絞り、地元農業および商工業と結託して、地産地消の市民スーパーへ。

若者向けのそういうやり方もあるのではないかと？ 大都市のただなかに、若者たちを吸引する広場の産業を創出していくことはできないか？ 環境NGOなどさまざまなNGOをネットワーク化しつつ、さまざまな規模の企業や政府と協力して協同組合的に事業を展開する。

そのために、都市生協、大学生協、などをうまく生かしていくことはできないか？

5 さまざまな身体の多様な連鎖

問題：増える身体・飢える身体・病む身体・とまどう身体

増える身体：人口はなお増え続けている。2007 年で 66 億 7100 万人。18.3%が先進国、81.7%が途上国。

飢える身体：人間開発指数 HDI（下記の 3 つについて、（実際値－最低値）÷（最高値－最低値）で指数化したものの単純平均値。ただし、1 人あたり GDP については対数を用いる）でみると、下位 10 ヶ国はアフリカ、人間開発低位国もアフリカから中東に。

		最高値－最低値	加重率
長寿で健康な生活	出生時平均余命	85－25 歳	1／3
知識	成人識字率（2/3 加重）	100－0 %	2／9
	総就学率（1/3 加重）	100－0 %	1／9
人間らしい生活水準	1 人あたり GDP	4 万－100 ドル	1／3

（マラウイ [166 位] の例：余命 39.8, 識字率 64.1, 就学率 64, GDP 646、指数：寿命 0.25、教育 0.64、生活 0.31、HDI=0.400）

病む身体：HIV／エイズ感染率：4000 万人

アフリカ、とくに南、東南アジア西よりから西アジアへ、ロシア

とまどう身体：高齢化と認知症 senile dementia

平均寿命 2005：日本 82.1, スイス 81.2, アイスランド 81.1, オーストラリア 80.6, スペイン 80.6, スウェーデン 80.5, イタリア 80.3, フランス 80.2, カナダ 80.2, ノルウェー 80.0

認知症：日本の高齢者 65-の有病率 3.0-8.8%。年間発症率 65 以上で 1-2%、65-69, 1%、75 歳を超えると急に高まり、80-84 歳で 8%。

歴史：人口爆発の継続と少子高齢化の途上国への広がり

人口爆発の継続：途上国、アフリカ、イスラーム世界、ラテンアメリカの一部を中心に貧困と宗教（イスラーム、カトリック）

中国・インドは増加制御：「一人っ子政策」「二人っ子政策」

中国：2002 高齢化社会に。インドは中国より緩やかで、人口増加を促している面もある。2000 年に 10 億を超えた時の雰囲気。中国への対抗意識？

少子高齢化は、しかし、ゆるやかに途上国にも広がりつつある。とくにアジア。2005 年：日本 1.3, 韓国 1.1, カザフスタン 1.7, 中国 1.8, ヴェトナム 1.8, タイ 1.9, スリランカ 1.9。モンゴルなどの低下率。

少子高齢化のいちじるしい社会：日本←高齢化が進むのにたいして、途上国的要素の導入をシャットアウトしている。Cf. アメリカ。自民議員連、50 年間で移民 1000 万人受け入れ提言（読売 080608）。

構造：新帝国下の少子高齢化と内部途上世界・途上世界

新帝国は長い目で見れば人口爆発を制御し、世界的な少子高齢化を引き起こす

←電子情報大衆消費化的生政治的生産

しかし、アメリカでは、内的途上世界（とくにヒスパニックやアフロアメリカン）のために少子高齢化は抑えられている。

西欧も少子高齢化が進んでいるが、内的途上世界の影響も。移民労働者。旧東欧諸国。

日本は内的途上世界が小さいため、少子高齢化が突出。

韓国はすでに日本を抜いており、やがて中国や東南アジア諸国も。

インドは人口増加。

その他途上国もまだ増加。

アフリカは突出。

対照的に、ロシアなど旧ソ連東欧圏では、体制崩壊の影響がのこり、人口減少。

意味：手段としての出生・価値としての出生・選択としての出生

出生は、最初は生きるための手段。そのようなものとして価値でもあった。

宗教がそれを追認：カトリック、イスラーム、ヒンドゥー、仏教、儒教

宗教改革が行われ、産業化が進むとともに、それがしだいに選択の問題に。

それでも最初は、構成的権力によって制御されていた。

フーコー、性の歴史、生政治的生産

フォーディズムと大衆消費社会以降、民衆の選択の問題に。

新帝国の生政治的生産はそれをあらためて制御しようとしている。

アフリカやイスラームを切り捨てようとしながら。

戦略：リプロダクティヴ・ヘルス／ライツと高齢者・青年対策

途上国（とくにアフリカ、イスラーム、中南米）では、まずリプロダクティヴ・ヘルス／ライツが必要。

女性の自己決定権。←フェミニズム

性器の一部切除、スカーフの強制、などをなくしていく。

それと並行して経済成長。身の丈にあった。Vernacular な。

ローカルな共同性の創出。

先進諸国の高齢者・青年も同じような立場にある。

取り残されていく地域：高齢者をターゲットに独自の経済社会圏

大都市部のフリーター、ニート：学びの場と労働の場を合わせたローカルな共同性。

向上を知り、仕事を知り、ふれあいを知っていくような共同性

大学生協や都市生協のような協同組合がそういうことに貢献できないか？

周縁化されていく地域、エスニシティ、性、世代が、環境親和的で、階層性を固定化しにくい共同性を立ち上げ、そうした共同性の和をつないで地球市民社会の基礎を安定させていく。

そうした共同性の無限連鎖を地球市民社会のリゾームにしていく。

主体：愛し合うヒトとしての市民

以上をつうじて、人びとが非暴力で、節制し、ネットワークしつつ、たがいに愛し合うヒトになっていく。

アフリカ、西アジア、南アジア、東南アジア、ラテンアメリカの人びとと、BRICs など成長諸国の人びと、および先進社会の人びと。

女と男、高齢者と若者、活動世代と子どもたち。

市民たち、高齢市民たち、若年市民たち、がたがいに愛し合いながら、地球生態系のなかにとけ込んでいく。

宇宙進出もそのことをつうじて。

住民的地球市民から宇宙市民へ。

6 地球社会システム化の方向

問題：地球社会の事実上の無政府状態

以上をつうじて、事実上地球社会が形成されてきているにもかかわらず、その共同性と階層性を、生態系内在性を視野に入れつつシステム化していく装置と方向性が、まだきわめて弱くしか形成されてきていない。

前提としての国際社会のシステム化のための当面の足がかり・手がかりは国連であるが、それもまだかなり弱体。

国連の諸活動を補うため、またそれらの不十分さに我慢がならず、多くの NGO が叢生してきているが、それらもまだまだ弱体。

地球社会はまだ事実上無政府状態に近い。

歴史：国連の機能不全から機能化へ、しかしなお改革の停滞

安保理と総会、常任理事国の支配、米ソ対立による機能不全。

1960年代以降、新興独立諸国の大量加盟で総会の比重高まる。

1970年代半ばから先進資本主義諸国、サミット体制へ。

ソ連東欧崩壊後、アメリカに一国主義的傾向。

このかんに NGO の簇生、経済社会理事会をとおして力を。

しかし、NGO の力はまだまだ十分でなく、それらを利用して国際社会を国際市民社会化し、さらには地球市民社会化していく国連の意識も力も十分でない。

第5代デクエヤル 1982-91

第6代ブトロス・ガーリ 1992-96

第7代コフィ・アッタ・アナン 1997-2006

第8代潘基文(パン・ギムン)2007-

米ソ冷戦終結後、ブトロス・ガーリ、予防外交、平和創造、平和維持、平和強制、平和構築などで国連に力を持たせようとしたが、アフリカでの失敗などでアメリカ反発。

アナンは国連の機能を取り戻そうとしたが、ブッシュ以後のアメリカに一国主義的傾向。国連をしばしば無視あるいは軽視。

NGO の簇生と多様な展開：国連と直接関係のある NGO だけでも 1500 以上、各国内のものまで含めると 6 万以上もあるといわれているが、まだまだ力は弱い。

構造：国民国家・超大国・サミット・国連・NGO

国民国家（主権国家）：

近代西欧が世界制覇とともに広めた単位だが、人口・富・権力・軍事力などに差がありすぎ。実質的には 19 世紀末以降、帝国主義国が牛耳る。イギリス、フランス、アメリカ、ドイツ、日本、イタリア、ロシア。

2つの世界大戦をつうじて2つの超大国：アメリカとソ連。イデオロギー闘争。核軍拡競争。1991年までにソ連東欧崩壊で決着し、アメリカが唯一の超大国に

サミット：先進国→主要国

1975年にフランス・ジスカールデスタンの提唱で始まる。経済サミットとして始まったが、政治的意味大きい。

社会主義体制に圧力をかけ、中国の現実主義化、ソ連のペレストロイカを引き出し、ソ連東欧崩壊の主因とも。米ソ冷戦崩壊後、1990年代半ば以降はロシアも参加。

国連：加盟国 2007 末で 192。

総会、事務局、信託統治理事会、国際司法裁判所
安全保障理事会

経済社会理事会

常設補助機関：国連開発計画、国連貿易開発会議、など

専門機関：国際通貨基金、国際復興開発銀行（世界銀行）、国際労働機関、など

関連機関：世界貿易機関(WTO)、国際原子力機関(IAEA)、など

NGO

アムネスティ・インターナショナル、世界自然保護基金、グリーンピース・インターナショナル、地雷禁止国際キャンペーン、国境なき医師団、ヒューマン・ライツ・ウォッチ、気候行動ネットワーク、地球の友、ケア・インターナショナル、オックスファム、アタック、ジュビリー・デット・キャンペーン、など

超大国アメリカが、サミットをつうじて主要国を動かすとともに、安保理をつうじてロシア、中国を統制し、その周りに欧米先進諸国や産油国やブラジルなどを引きつけている。

意味：新帝国に支配される国際社会と地球市民社会の胎動

国際社会はグローバル化のもとにあつて新帝国に支配。

国境を越えて全地球に広がる生政治的生産、電子情報大衆消費社会。

アメリカが、京都議定書から抜け出したあと、9.11 を機に軍事大国化。イギリスと日本がこれにつく。仏独などが反対したが、ロシア、中国は、経済成長専念で、距離を置く。

これにたいして、アフガニスタン・イラク戦争反対の市民運動、世界に広がる。背後に NGO の多様な活動。

アメリカのイラク戦争は石油事情を好転させず、アメリカは穀物燃料の開発に重点をかけ始める。環境対策のようにも装いながら。しかし、そのために食糧危機が世界に広がり始めている。地球温暖化もいっそう進展。

これらにたいして、市民運動、アフガニスタン・イラク戦争反対から石油価格高騰への抗議、食糧危機への抗議、地球温暖化全般への抗議などに広がってくる。

地球市民社会の胎動。

戦略：国民社会の市民社会化をふまえて地球市民社会へ

新帝国の軍事化とともに紛争処理があらためて重要に。アメリカの一国主義。多国籍軍形成。←核軍産複合体。

しかし、長い目で見れば、紛争処理から地球環境回復をつうじて格差是正へ。経済社会理事会の役割、NGO の役割。背後思想としてのポストコロニアリズムの出現。

こうした方向を見据え、国民社会を市民化しつつ、国際社会を市民化し、地球社会を市民化していく。

未市民社会の市民化と脱市民社会の再市民化とを、情報ネットワーク・市民ネットワークをつうじてリンクさせつつ。

要としての中国の市民化とアメリカの再市民化。両者をリンクさせるような日本社会の市民化ができないか？

主体：住民的・国民的・国際的・地球市民へ

以上のために、地域ごとに小さな共同性を。それらのネットワークを。

それらをつうじて、国民的市民としての権利を放棄せず、公平な意見反映システムを要求し、国民社会をくり返し再市民化していく。完全比例代表制に近い普通選挙制度の実現。

そうした国民国家=市民政府の代表を国連に送り、国際世論と国際政策の形成を。

市民たちは、それと同時に国境にこだわらず運動の輪を広げる。ATTAC(1997-市場の武装解除)や Jubilee Debt Campaign(1996-貧しい国の債務帳消し)のような反グローバル化運動。

それらをつうじて住民的・国民的・国際的・地球的・市民=21 世紀の地球市民へ。

IV 市民の生き方

1 市民生活の構造

労働生活の場と市民生活の場

市民＝生活者の日常生活の形態。図1参照。

労働生活の場＝職場：労働力の消費の場。代償として得られる賃金・給料が生活の資金。その代わりに労働者は、職場の要求（仕事と規範）を受け入れねばならない。

過労死問題、「名ばかり管理職」問題、など。

市民生活の場＝家族＋地域社会：労働力の再生産の場→現世代＋次世代。自治体が規制。住民税を払い、サービスを受けている。

通勤：市民生活の場と労働生活の場の往復。農家や自営業者では原則ない。大都市のサラリーマンほど、2つの場の距離が離れ、往復に時間がかかるようになってくる。職住近接の重要性。米欧でも大都市では通勤時間が長い、とくに日本の大都市では長い。

余暇、レジャー：会社の施設、本当のリクリエーションか？ 近隣の施設、充実しているか？

旅行：非日常の世界へ。国内旅行から海外旅行へ。ヴァカンス。

生活時間：かつては盛んに調査がおこなわれたが、プライバシーの問題でやりにくくなってきた。

国家（中央政府）はこれら市民生活の場全体を規制、支配。

生活形態と社会構造との連関

形態から構造へ。デュルケム社会学の意義。

経済構造：狭義、生産と分配（流通）を中心に

広義、社会構造のみならず政治や文化まで含む

政治構造・文化構造：これらも広義では社会構造や経済構造を含む

社会構造：狭義、経済（土台）と政治・文化（上部構造）を媒介

広義、全社会構成

これらを成り立たせているのが、市民＝生活者＝労働者の日々の行為＝労働と生活。

市民がこれらの構造に規制されつつ労働し生活することをつうじて、これらの構造が維持され続けている。

構造と主体の問題。言説が両者を媒介している。「大学を出たら就職しなくてはならない。」「勤めたら会社のために働かなくてはならない。」「職を得たら結婚して家族をもつのが望ましい。」「子どもを育てるなら若いうちだ。」などなど。

生活・社会構造の位相循環

構造と主体の媒介、市民の生活と社会構造との媒介は、現実には次のような言説行為をつうじておこなわれる。

←宗教社会学からの教訓。

社会の成り立ちを想起し、生活世界の意味づけをやり直す位相：聖。大学の卒業式、入社式、新人研修、など。

日常生活、習慣、慣習、自然に引きずられ弛緩する面、引き締めようとする面：俗の位相。日々の仕事、緊張解除のための「いっぱい」、ゴルフ、など。

弛緩を楽しむ位相：遊。大人の「いっぱい」やゴルフ、趣味、旅行、など。子どもの場合は学びと遊び。学びには聖と俗の面もあるが、基本的には遊。よく学び、よく遊べ！ 子どもは学びと遊びをつうじて社会化されていく。大人の遊びとしてのセクシュアリティ。

青年の意味：モラトリアム。高度な遊。遊は学に通ずる。遊学。

遊（学）からの批判が行為に移され、社会批判や社会変革の運動になる：乱。学生運動、青年運動、社会運動。

職場の規律と社会規範：現代の聖と俗

労働および労働生活の場＝職場を聖化したのがプロテスタンティズム。

その後英仏米独日ロなどでその役割をはたしたのは、それぞれの国の宗教的伝統を組み込んだナショナリズム。ソ連ではイデオロギー。大ロシア排外主義。

国民の休日、多くは建国の歴史や神話などを中心に仕組まれている。聖の構成。

職場の聖を基礎に社会の秩序を維持：社会規範。戦後日本の経済成長とモーレツ社員。それを支え続けたのが学校。

学校＝近代公教育の役割：社会規範を先行的に子どもたちに教え込んでいく。学校が聖化される。日本の教育勅語は典型例。戦後は民主教育の緊張。学びと遊びを無視したことから、やがて弛緩して授業崩壊へ。この間に学生反乱から生徒反乱へ。

民営化、民間活力の活用などをつうじてバブルへ。バブルがはじけて聖と俗の収縮。この間に職場と社会をめぐる労働基準法体制が崩される。パートのみでなく非正規雇用の増大。職場の聖が怪しくなっているばかりでなく、ワーキングプア層の拡大などで社会の聖ですら怪しくなっている。

こんな聖が俗化しては困る？

学校・青春・余暇・大学・青年：現代の遊

学校はもともとは子ども時代を定着させ、制度的に遊を生み出す：学びと遊び。

在学期間の延長とともに青春が生まれる：放浪、とくに大学生、アイデンティティの危機と確立。

労働者も余暇を獲得する：休養、スポーツ、趣味、旅行、放浪も。

大学の大衆化、大学院の普及：モラトリアムの時期、青年層、1960年代アメリカのヤング・ラディカルズ。

遊をつうじて現状を批判的に見る→社会批判。学生運動。

青年運動、労働運動もやがてこの面をもって来る。

学生運動から市民活動へ：現代的乱の可能性

学と遊から生まれるほんものの乱としての学生運動。

労働運動もそれに同調したこともある：五月革命。

学生運動からあらゆる運動への展開：1960年代アメリカの社会運動。

公民権運動→学生運動→反戦運動→大学闘争→女性解放運動→環境運動、高齢者運動までも。

市民運動から市民活動へ：成熟と定着。

インターネットの普及：市民からネットワーク市民（ネティズン）へ

2 どう仕事をするか？

Calling としての職業

かつて仕事＝職業は Beruf=calling であった。

学校制度が普及してきた。

学歴エリートの誕生：ポスト身分制社会のエリート調達方式。「社会的エントツ」としての教育制度。

しかしなお、家業の多くは世襲であった。跡取り。

戦後の日本の高度成長期：集団就職の時代→出稼ぎの時代→学生大衆化の時代。

マッチかミスマッチか

この過程をつうじて、ミスマッチが多くなった。

それでも、学卒採用・終身雇用の時代は続いたが。

早期離職、再就職などでミスマッチを早期に矯正しようとする世代も多くなり、

新自由主義の世界的波及などで企業環境も厳しくなって、

やがて、日本的雇用システムは維持されがたくなってきた。

フリーター：準完全雇用から失業時代への過渡期。まだいい面もあった。生活が立てばあとは趣味で能力を発揮する。しかし、バブルの崩壊とともに訪れた失業時代のなかで、多くはワーキングプアに落とされていった。

この間に、学校のディスファンクションが目立つようになり、不登校者が多くなった。ひきこもりも増えた。

いまやニートが、マッチかミスマッチかを試そうともしない世代として現れている。

仕事志向・キャリア志向・手段主義・組合主義

第二次世界大戦後の労働者の労働意識研究。

トゥレーヌやブラウナーの「労働と疎外」の研究。

ゴールドソープらの「豊かな労働者」の研究：手段主義の発見。

庄司興吉や稲上毅の研究：とくに後者から日本労働者の独特のキャリア志向論。

仕事に生きる：仕事志向、成長期の日本に多かった。仕事志向がキャリア志向と結びついていたからでもある。

仕事をつうじて昇進・出世をねらう：キャリア志向。公務員などを中心に終身雇用時代の日本に多かった。

手段主義：結婚退職する女性労働者の多く。やがて男性にも広まる。意識的手段主義も現れてくる。フリーター↑。価値観の多様化。

組合主義：ある時期までは多かった。戦後日本の労働運動。キャリア志向と結びついたりもしていた。今はキャリア志向に吸収？

仕事をつうじて社会を変える

市民はまず、それを考えるべき。

いい仕事をして社会に貢献しているかどうか？ 仕事をつうじて吟味する。

もし悪いことをやらされていたら、内部告発する。内部告発にかんする価値観の変化→保護法制定。

どんないい仕事をして、この仕事では限界がある。と考えがちだが、本当にそうか？

専門職、管理職は明らかにそうではない。医師、弁護士、技術者、研究者、などの役割については言うまでもない。管理職は、どんなに小さな組織の管理職でも、その組織の社会的貢献について配慮することができる。

事務職や販売職だって。良い事務でいつもすっきりしている組織。大学などではとくに事務職員の働きぶりが重要になってきている。販売職も、良い商品やサービスを消費者に売った時の満足感。

生産労働はとくにいい仕事をする事自体に意味と満足感がある。職人芸。大きな機械を操ったり、監視・運転する労働でも、疎外感を克服する努力が続けられていれば、大きな満足感がある。

サービス労働の意味はとくに高まってきている。高齢化社会ではとくにそうだ。高齢者は多かれ少なかれ障害者であり、すべての人は高齢者になるのだから。看護労働、福祉労働、介護労働、など。

キャリアをつうじて社会を変える

公務員にはこの意識が強い。それが悪く出る場合もあるが。

昇進するとともに権限の拡大。拡大した権限でいい仕事を。

政治と結びついて必ずしも良くない傾向も。

しかし、いい仕事をしようと思えばできる。

個人の役割は現代社会でも小さくはない。

厚生省→厚生労働省の役人の例。

大企業のなかでも同じようなことはいえるであろう。

大企業の活動方向を平和、貧困対策、環境、福祉などの方向に向け変えていく。

組織内キャリアだけでなく、組織間キャリアも考えることができる。いろいろな企業や役所などを渡り歩き、自分なりに到達した役職で社会貢献をしていくことも可能であろう。

多くの大学でキャリアプランニングを本格的に教えるようになってきている。

若者たちがキャリア形成をつうじて社会を変えていくことを考えることもできるようになってきた。

仕事以外で社会を変える

仕事はきちんとする。しかしそこからはあまり期待できないので、組合活動をする。

かつては組合活動に没頭する意味があった。今はない？ 労働基準法体制が崩れ、多くの人びとが非正規労働や、「名ばかり管理職」などの不当待遇にさらされている現在、組合活動には新たなフロンティアが広がってきているのではないかと。次章。

家族サービスに徹したり、趣味に生きたりするの悪くはないかもしれない。個人的な遊の領域へ。家族も趣味もいろいろな形で社会につながっている。それを見出し、それぞれのやり方で社会に働きかけよう。そこから思いがけない世界が開けてくることがある。とくにネットワーク革命と結びつけば。市民活動への接続。次章。

NPOやNGOにコミットするのは、もちろんもっとも有望な社会参加へのルートである。次章。

3 社会参加のさまざまな形態

労働組合の変容

労働組合への参加は、かつては社会参加の有力な形態であった。

次に来る社会の学校。新しい社会。社会主義。

ネオリベリズムが拡大し、組合つぶしが行われ、組合は多くの場合、企業に吸収された。

中国は市場社会主義に踏み切り、ソ連東欧は崩壊した。

グローバル化。

組合に蘇生の可能性はあるか？

パートに加えて派遣など非正規労働の増大。フリーターは乗せられる。グローバル化。ワーキングプアの増大。労働基準法体制のなし崩しの破壊。

これらにあらためて市民の視点から取り組む。

労働者が市民の視点から企業の意味を考え、組合の意味を考え直す。

女性、青年、高齢者も、あらためて市民の視点から、働く機会と場と条件の問題を考え、それらを継続的に確保していく手段として組合のことを考える。

市民運動への参加

労働運動の不足を補った住民運動、市民運動。

住民運動はなんらかの形でエコロジーをふまえていた。その意味で特定の。

市民運動は普遍的。

エコロジーをふまえた住民運動が普遍的になった例＝地球環境運動、グリーンピース、WWFなど。

市民運動が人権を主題に地球的規模に広がった例＝アムネスティ・インターナショナル

格差是正：開発援助

＝オックスファム、シャプラニール

その他いろいろ。

市民運動が NGO につながった。NGO に発展した。もともと NGO であった。

しかし、地球的規模への拡大の過程で、多くの市民がついて行けなくなった？

市民たちが市民運動を見失った？

市民運動から市民活動へ

市民運動が見えがなくなったのは、大きくなるとともに市民生活に浸透していったからでもある。

デモがなくとも市民は動き続けている。

市民運動から市民活動へ。

運動形態の変化。運動概念の革新。新しい社会運動から新しい社会活動へ。社会が変わるということの意味。言説理論を取り入れた考え方。

情報化の流れに乗り、情報面から活動を進める。言説行為を積極的に活用する。そのうえで、身体の動かし方は諸個人に任せる。

さまざまな広報活動。NPO 活動。ロビー活動。

郵送を使った活動。

郵便からインターネットへ。

ネットワーク革命の意味

市民たちのコミュニケーションが急速に、かつ地球的規模へと広がった。

インターネットをつうじて情報や財（カネ）がやりとりされ、大きく広がったかわりに

全体像が見えにくくなった。

言説も横行している。言説のなかに入り、言説をコントロールする必要。言説のなかで自分を見失う人びとも当然出てくる。

見失う人びとへの配慮。自殺をめぐる言説。(無差別)殺人をめぐる言説。その他。にたいして、新しい時代に生きる意味を説く言説を流し続ける。

つながりを促す言説。友愛を説く言説。ヴァーチャルなつながりだけでなく、ヴァーチャルなつながりをリアルなつながりに媒介する言説。

共同性あるいはコミュニティの意味を説き続ける市民活動。

そうした市民活動から市民運動が生み出されていく。

たとえば、反グローバル化運動あるいは対抗グローバル化運動：もう一つの世界は可能だ！

その前提の1つとなった ATTAC。また、WTO やサミットなどへの抗議活動、抗議運動。

マイルームからの参加

インターネットのために市民活動・市民運動への参加がマイルームからも可能となった。

NGO などのホームページを開き、そこからどのようにでも入り込むことができる。

情報だけでなく、カネとモノのやりとりもできる。

言説もできる。流れている言説を分析し、それらを加工して、自分が望ましいと思うような方向に社会を動かす言説を流すこともできる。

人との接触がほしくなったら、集会などに出かけていけばよい。

自分のしたことの成果もある程度までは確かめられる。

遊と乱のあいだの振動

また、マイルームからのネットワークへの接続には個人の遊の要素がある。

仕事から運動や活動への接続は、ほんらい遊の領域をとおしておこなわれるべきであったのだ。

かつての、ノルマとしての組合運動。ノルマとしての住民運動。市民運動。

ネットワーク革命とともにそれらがヴァーチャルな領域に拡散したことから、仕事からそれらに転換して行くにあたっての、遊の領域の重要性が浮かび上がってきたのだ。

聖なる仕事が俗化されておこなわれているなかで、そのことに問題を感じた個人は、一度自分に戻り、あらゆる規範を解除して自分を遊の状態におき、自分の深淵を除いてみて、そこから社会や仕事を見直す機会をもっともつべきであったのだ。

自分の深淵から仕事や社会を見直してみて、それらに問題を感じたとき、乱への動きが起こる。

そういう遊と乱とのあいだの振動をもっと思い切ってしてみることに。

そうすることをつうじて、フリーターやひきこもりやニートなどに新しい世界が開けてこないか？

ワーキングプアは遊の余裕ももてないので、市民たちの運動で援助する必要があると思うが、

4 永劫回帰としての愛と死

生態系内在性の確認

遊と乱の底にあるのは生、とくに性。

われわれ一人ひとりの生態系内在性の証拠。38 億年に及ぶ生物進化の歴史に根ざしているから。

生、性、愛、死：キリスト教の禁欲ではもとより、仏教の生老病死、道教の形生老死などでも隠されている。

性におおらかな文化：多神教と関連？ ギリシア神話や日本神話の例。

近代の禁欲主義←ヴィクトリア文化←プロテスタンティズム

フロイト Freud, S., 1856-1939 の登場。ヴィクトリア的文化のなかに生きながら性と生（の抑圧）に翻弄されている人びとの病理を暴き出し、解放への道筋を示す。

ライヒ Reich, W., 1897-1957 の悲劇。性的解放による生の解放を唱えたが、世間に受け入れられず、獄中死。

フーコー Foucault, M., 1926-1984 の登場。近代そのものを性と生の抑圧の構造として暴き出す。

セクシュアリティの浮上

とくにフーコーによりセクシュアリティの概念が浮上。人間の性的な振る舞い、性をめぐる生き方。

ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』のあとを語り、マルクスの『資本論』の仕上げをする概念。

近代的セクシュアリティの概念は、一夫一婦制を中心に、ロマンティック・ラブと神聖なる性に人間を縛り付け、労働力の継続的再生産を可能にしてきた。勤勉に働き、適齢期に結婚し、適切な数の子供を産み、育てる。子どもは新たな労働力となる。兵力ともなる。

売買春、同性愛、自慰、変態、不倫、などがタブーとされてきた。そのくせ、不満を爆発させないための捌け口としては、黙認されてきた。

ライヒの闘いは、こうした偽善を暴き、性的欲求を健全なものとして、社会変革に動員しようとしたもの。ビオンやオルゴンの概念は行き過ぎだったかもしれないが。

フーコーの闘いは、性の抑圧の理論をポスト構造主義的な言説理論に展開し、近代の欺瞞を徹底的に暴き出そうとしたもの。晩年は、活路を、古代ギリシアの穏やかで開放的な性文化に求める。

ドゥルーズとガタリは、フーコー的な視点をさらに展開し、全歴史を書き直そうとしたもの。資本主義をオイディプス・コンプレックスからでたものと見なし、人類社会の基層に蓄積されている性的欲望の層=リゾームからの人間解放の諸相を「千のプラトー」として明らかにし、そのうえに人類史の未来を展望しようとした。

家族アイデンティティの多様化

性の解放、セクシュアリティの多様性の容認、の結果、家族（アイデンティティ）が多様化してきた。

標準的な家族=核家族だけが家族なのではない。

片親家族、女（男）カップル家族、ペットを含む家族、バーのママを中心とする家族、などもすべて家族として認められるべき。

しかし、同性愛家族を社会が公認するかどうかは、大きな政治問題となっている。アメリカの保守政権の対応。サンフランシスコの進歩的行政。

これらについてはなお論争が続くかもしれないが、少なくとも家族の形を選ぶ権利、家

族によって差別されない権利は保障されなければならない。

教育にたいする社会の義務

生まれによって差別されない権利。

社会が教育の義務を負う。

あいだに親権者が入らない場合でも、それによって不利益を被らないように。

義務教育の期間はもちろん、それ以上でも不利にならないように、奨学金制度の充実が必要。給与の奨学金が事実上なくなったのは日本だけ。学生が騒がず、親たちもおとなしく授業料を払ってきている。こんな社会で良いのか？

介護にたいする社会の義務

死に向かっても、最小限の条件は保障されるべき。

最小限介護についての社会の責任。

特定個人への介護負担の集中を避ける。

できるだけ、自ら死にゆくのを助ける。尊厳死の問題。

死を見つめることは、生を見つめ直すこと。ハイデッガーの解釈学的現象学。

そのことをつうじた社会への貢献。死を見つめることをつうじて見えてくることがある。とくに近代は、すべての人がしきりと忙しがり、死を見つめようとしてこなかった。まるで必死に死から逃れようとするかのように。

日本でも高成長の前期、すなわち 1960 年代半ばくらいまでは、身近なところに死があった。私の体験。小学生のころの同級生の死。管理されていなかったプールで溺死した子。豪華な葬式。私の個人的な思い出。家の前で遊んでいて、交通事故にあって死んだ子。頭が割れ、脳みそが飛び出し、親が洗面器をもってきてそれを拾っていったという話し。自分の兄の死。長いあいだ死の夢に悩まされ続けたこと。

死と生の研究、死生学 *thanatology* がもっと必要。教育のなかにも取り入れなければならない。いくつかの大学では試みられてきているが。

死と聖俗遊乱一切皆空

死はすべてを無化する。本人にとって。

すべてはそれによる変化を含んで存続する。社会にとって。

変化の大小。

レーニン 1870-1924 の死。レーニンが早死にしなければ、ソ連の運命は変わっていたかもしれない。社会主義の運命も変わっていたかもしれない。人類史も変わっていたかもしれない。

信長 1534-1582 の死。信長は朝廷の役割に重大な変更を加えようとしていた。かれが長生きしていたら、日本の天皇制は変わっていたかもしれない。今日の日本人の運命が変わっていたかもしれない。

しかし、いずれにしても変化は変化。パンタ・レイ。

時間の問題。起点から終点への一直線進行。無始無終、万物循環。輪廻転生。

社会は聖俗遊乱のくり返し。すべては消えていく。消えていく途上のものを集めて構成し、現実を意味づけるのが歴史。

そのくり返しを透視する。→聖俗遊乱一切皆空。

5 投票の意味と中途半端さ

それでも社会は良い方がよい

すべては空であるが、いやだからこそ、すべては良い方がよい。

聖俗遊乱を生きる市民の視点からして。

社会もしかり。

良い社会とは？

多様な価値観をもつ市民が互いの価値観を調整しながら自主的に何が良いかを決めていく社会。

そのための制度的保障。普通選挙制。

形式が良ければよいのか？ 多数決が間違っていたらどうする？

多数決はしょっちゅう間違ふ。だから、少数意見は尊重されなければならない。

多数の誤りが致命的なものだったらどうする？ 致命的であるようなことを多数決で決めるはいけない。死刑がその例。

極端なことをいえば、多数の人間が人類は絶滅するべきであると考え、集団自殺を決議することもありうるのではないか？

形式論理的にはありうる。この点については、形式は、文字どおり抽象的な形式ではなく、百億年を超える宇宙進化史、数十億年の生物進化史をふまえた人類の歴史のなかにあることを想起すべき。人びとは歴史的に制約された存在であり、自由に決断する場合でもそのなかでしかなしえない。

自由の意味。サルトルの実存主義にたいするハイデッガーの批判。

主権者としての市民・再考

普遍的市民は主権者であった。

古代ギリシアを措くとして、10世紀をかけて獲得してきた生き方。

結果としての民主主義。

討論のうえ、決着がつかなければ多数決。

しかし、うえに述べたような理由から少数意見の尊重が絶対必要。

そのための制度こそ普通選挙制と理解すべき。

選挙制度のために十分に市民になれない

普通選挙が施行されていても、選挙制度の中味が悪いため、市民になれない場合。自分の意見がそれなりの重みで反映されないから。

小選挙区制。二大政党制との組み合わせで、政権交代が起きやすくて良いとされてきているが、市民の多様な意見を二大政党に収斂させるのは原則的に無理で、現実的にはむしろ最悪ともいえるべき制度。

イギリスの例：労働党の出現以後は二大政党ではない。

アメリカの例：選挙人選出を原則とする大統領選挙との関連で、二大政党制が無理強いされる形になっており、選挙の柔軟な運営を妨げている。

比例との組み合わせ。併立は、比例部分の割合にもよるが、原則的に駄目。併用で結果として比例代表になるなら良い。

中選挙区制。戦後日本で長く取られてきた制度。中悪。

比例代表制。ヨーロッパ大陸の多くの国で採用されている。最善。

政権不安定？ 変化の激しい時代には情勢に合わせて適宜変えられる方がよい。選挙制度を簡便化し、金のかからないものにすること。

意に染む政党がない

選挙制度が合理的でも、意に染む政党がなければ、、という問題。

どうしたらいい？

政党を起こす？ なかなか大変。自発的結社（アソシエーション）をある範囲以上に広げるには、多大の労力と財力を必要とする。しかし、インターネット時代にはもっと簡便な方法があるかも、、

既存政党に変化を要求する？ 新聞への投書などで。これにも、インターネット時代にはもっと容易で効果的な方法が現れつつある。韓国で議員資格を問題にした例。

それも容易にはできない場合、既存政党を前提に自分の意見にもっとも近い選択をする。無党派層。Cf. 無関心層。

伝統型無関心→現代型無関心→無党派層：市民的成長の過程。

ここからのさらなる前進をどう考えるか？

比例代表制と少数意見の尊重

以上をまとめると、市民の社会にもっともふさわしいのは、比例代表制で市民の意見のヴァリエティ、分布をもっとも忠実に議会に反映させられる普通選挙制度。

そのうえで議論をする。

議論のうえ意見が分かれているにもかかわらず決定せざるをえないときには多数決。

しかし、少数意見はあくまでも尊重。

とくに、少数意見の方がのちになって正しかったことが判明する可能性がある場合には。

死刑制度の問題は上に挙げた。死刑は現在の日本の裁判制度のもとでは、裁判官が言い渡すものだが、裁判官の任命も基本的には間接的な選挙によっており、多数決の問題性に通じている。陪審制の場合には直接に関連。日本で施行される予定の裁判員制度でも同じ問題が出てくる。

形式主義批判にたいしては、うえて応えた。

形式が優れて内容的な意味を持っているのが民主主義。とくに選挙制度。

新帝国はそれでも脱市民化する

比例代表制を基礎に少数意見を尊重する民主主義ができあがっても、それが一国単位にとどまるかぎり、地球社会化しつつある現代社会の動きに取り残されていく。

すでに見たように、新帝国と呼ばれるような地球大の支配システムが立ち上がり、アメリカのような大国がそれを利用して、一国あるいは各国市民社会の市民たちの頭越しにかれらの意志に反するような決定と行為を行っていく場合には。

ひとたび市民性を獲得した人びとが脱市民化されていく。

現実にはまだ市民になり得ていない人も膨大な数存在する。

単純明快で公平な選挙制度がまだない社会。未市民社会。

あっても公明正大におこなわれない社会。事実上の未市民社会。

公明正大におこなわれても選挙制度が不備な社会。準未市民社会。

未市民社会の市民化と脱市民社会の再市民化を、くり返しくり返し求め続けていく。

6 市民になり直す

一国市民から地球市民へ

市民であり続けるために、市民たちは今や、一国市民から地球市民へと脱皮しなければならない。

そのために、現在の不完全な国際市民社会の意思決定組織をできるだけ完全なものに近づけていくこと。

国連の改革。

たとえば、総会の世界議会化

二院制にして、一方を国民国家単位（たとえば1国2人、計約400人）の議会とし、他方を人口比例（たとえば1000万人に1人の代表、計約650人）とする。

アメリカの上下両院制に似た仕組み。

小国の意見を尊重すると同時に、人口大国の意見も尊重する。

また、人口大国の横暴を許さない。

世界にこれだけの貧富の差と超大国、大国から弱小国までの差がある以上とても無理？
既得権を持つ超大国・大国が世界の経済力・権力その他を平均化する案など呑むはずがない？

とてつもなく非現実的な夢物語？

そう思えばできることもできない。理念を信ずる市民の力に頼る。

以上を前提に、安保理・社会経済理の世界政府化

総会が構成を決めて、立法し、執行させていく。

国際司法裁判所が執行を監視する。

一国市民の権利を放棄せず、地域統合にも積極的になる

以上を実現していくために、市民は、一国市民としての権利を放棄せず、それぞれの政府に正論に即した国連改革を求めさせていく。

そのための世論形成。

市民はまた、それぞれの国に要求し、近隣の諸国との関係の緊密化、さらには統合への道を進めていく。

EUというモデル。

日本と朝鮮半島と中国との関係は、日本の過去の帝国主義、北朝鮮問題、台湾問題など20世紀の負の遺産を引きずっているのも、非常にむずかしい。

しかし、市民はあきらめるべきではない。過去の歴史を率直に反省しながら、北朝鮮問題、台湾問題の妥当な解決を求めていく。

北朝鮮問題：過去の責任を率直に認めながら、拉致はそのものとして正当化しえないことを主張していく。

台湾問題：過去の責任を率直に認めながら、中国政府と台湾政府との話し合いが進展するよう、あらゆる努力を重ねていく。

そのうえで、東アジア共同体構築の問題。

ASEANからの働きかけにも積極的に応じていく。

同時に地球市民への多様なルートを開く

市民は同時に、国民国家だけに頼らず、自らただちに地球市民となる道を歩み始める。

NGOなどをつうじて。

身近にあるチャンスができるかぎり利用して。

アムネスティ、グリーンピース、シャプラニール、国境なき医師団、などの例。広く渉

猟してみるのも良い。しかし、どれか1つに集中しなければ本当のことは分からない。

大学生協は日本におけるNPOのさきがけ。日生協の活動家たちを育てて送り出した。学生、院生、留学生と教職員とからなる本当に民主的な生協を東アジアからアジア全域、さらには世界に広めようとしている。

国際協同組合同盟（ICA）にも加盟。ICAは世界最大のNPO, NGO。加盟組合員延べ人数8億人。グローバル300の売り上げで1兆米ドル。カナダのGDPを上回る。

このほかに、研究教育奨励財団へのコミット。製薬会社の研究倫理審査委員会へのコミット。

市民（シティズン）からネットワーク市民（ネティズン）へ

インターネットなどを利用して、市民としての活動の幅を広げていく。

仕事の間から。自分のホームページで教育を補強。研究にも大幅に利用。雑事にとらわれず脳を生かす。教育と研究をつうじて地球市民学を創り上げていく。

社会活動の間から。学会も広く浅くだけでは駄目。いくつかにしぼって深くコミットしてみる必要。大学生協については上述。理事会、総会、その他の集会で述べたことをテキスト化し、ホームページに掲げている。英文のページも設けている。

マイルームから。自分のホームページや大学のホームページを利用して、世界の市民への訴えを続ける。市民の意味について。市民として目覚め、活動することの必要性について。高齢市民について。残された生を有効に生かし、自らをなお高めるとともに社会に貢献することについて。

地球市民として世界にも訴えかけていく。そのための言語の問題。

言語の問題を実践的に考えていく

とにかく使える言語から出発するしかない。

実際には、英語が地球社会の事実上の共通語になっていく？

使いながら、世界中のあらゆる人から見てもっとも使いやすい英語に変えていく。

Globish!!

イギリス語やアメリカ語に特権を与えない。文句を言わせない。

自分の考えていることをできるだけ分かりやすく言う。文法は意味が構成できていればよい。あまり複雑な文章は書かない。

問題は内容。メッセージに力を込めること。

すべての人が発信できるようになったのだから。そして、何についても検索できるようになってきているのだから。

永劫回帰としての愛と死・再論

いろいろやりながらも、最後は地球生態系とのつながりの確認。

それをつうじての宇宙との一体化。梵我一如。

梵我一如の原型で基本は両性結合。

そのために、市民は恋をする。いくつになっても恋をする。

そこからすべてが再回転する。

それでも、個々の市民は時が来れば必ず死ぬ。

エロスとタナトス。生性愛死が、形生老死につながり、生老病死につながり、社会と歴史の聖俗遊乱一切皆空を編み出している。

そのことを知ることにによる自己充足 *acquiescentia in se ispso!*